



松戸  
アートライン  
プロジェクト  
2010

とても新しい、それでいて懐かしい  
あらゆる場所がほくたちの表現の空間となり  
アートとまちなみが一体となった一ヶ月でした

松戸アートラインプロジェクト2010 カタログ

2010.11.20sat~12.19sun

<http://mal2010.com/>

# index

## 目次

- 4 「地域とアートの新たな関係」 松戸アートラインプロジェクト実行委員長・審査委員/土屋公雄  
 5 「松戸の風景アートの可能性」 審査委員/三谷徹  
 「新しい(郊外)都市のアートプロジェクト」 審査委員/毛利嘉孝  
 6 開催概要

### ■展示作品

#### ●旧・原田米店

- 8 池田剛介  
 9 大成哲雄+聖徳大学大成ゼミ  
 10 大山エンリコイサム  
 11 木村恒介  
 12 小松宏誠  
 13 西尾美也  
 14 満尾洋之  
 15 村上慧  
 16 山下竜司



#### ●日本大学歯学部松戸校舎

- 17 斎藤ちさと  
 18 戸井田雄  
 19 戸田祥子  
 20 松澤有子



#### ●坂 川

- 21 榎原歌華  
 22 武蔵野美術大学建築学科 土屋公雄スタジオ  
 23 山中彬充



#### ●伊勢丹広場 / 屋上

- 24 大山康太郎  
 25 近藤洋平



#### ●松戸伸和ビル4F / 5F

- 26 小原典子  
 27 村上鉄兵



#### ●ルシーナビル7F

- 28 井口雄介

●岡田ビル2F

29 太田遼



●松戸神社

30 枯山水サラウンディング



●稲葉邸ガレージ

31 毛原大樹



●都市綜合開発第三ビル1F

32 小山泰介



●アクセス根本

33 代本板 (中島佑太×石幡愛)



●宮ノ越地下歩道

34 千葉大学庭園デザイン学研究室 (大野+生田)



●津田ビル3F

35 津田翔平



●新角ビル3F

36 東京藝術大学

毛利嘉孝研究室+熊倉純子研究室+市村作知雄研究室

●街の各所

37 遠藤一郎

38 山本麻璃絵

■イベント

40 北川フラムシンポジウム

46 山川冬樹パフォーマンス

48 まちなかアート公開講座

49 伝統工芸土展

50 松戸アートライン市民フェスタ

51 アンケート

52 まちの声

54 データ





## 「地域とアートの新たな関係」

松戸アートラインプロジェクト 実行委員長・審査委員／土屋公雄



松戸市を含めJR常磐線沿線都市は交通の利便性に加え、東京藝大や千葉大といった大学が立地したところである。平成18年に設立された「JOBANアートライン」事業は、沿線の各自治体や、地域をより魅力あるものとするための芸術・文化の振興、またアートを媒体に、地域に眠る文化的資源を活用した新たな街づくり、コミュニティ再生を目的とした地域活性化のプログラムである。すでに取手市では、平成12年より「取手アートプロジェクト」を立ち上げ、市民・行政・大学・地元企業連携による独自の文化政策を推進し、全国にその活動を発信してきた。松戸市も遅ればせながら、平成20年に提案した景観基本計画・基本方針のなかに「芸術・創造性の豊かな景観づくり」を盛り込み、市民が身近に芸術に接する機会を通じて、景観に対する感性や創造性を育み、本市ならではの価値ある景観づくり推進に取り組むこととなっている。

今回この「松戸アートラインプロジェクト」は、「JOBANアートライン」事業の一環として行われたものであり、沿線自治体のアートを基調とした線の連携を図り、今後の松戸市の文化政策・地域活性化プログラムの出発点として実践されたプロジェクトである。

松戸駅西口周辺で展開された「松戸アートラインプロジェクト」は、多様な意味を含む「森」をテーマに、約一ヶ月間開催された。展示会場には、駅前とはいえ現在使われていない店舗や閉じられたままの民家、テパートの屋上や神社の境内、市内を流れる坂川デッキや倉庫・旧校舎などが用意され、31組のアーティストが様々な環境・場で、作品の公開制作からインスタレーション、映像からパフォーマンスと、多彩な表現・活動を創出した。アーティストの選出は、一部招待作家を除き一般公募が行われ、100案を超える応募作品の中から厳正に選ばれた作家たちが、場の特徴を取り込み、空間の持つ文化的・機能的意味とも連続しながら、サイトスペシフィック・ワーク（場に合った作品）を制作した。また、松戸はかつて水戸街道の宿場町として栄えたところであり、旧街道沿いには歴史的建造物も点在する。総合企画の中には松戸の魅力発見とし、地元在住の伝統工芸師によるワークショップや街歩きも行われ、普段出会えない伝統文化の妙味や、歴史的景観の確認、さらにはアート作品を通して見えてくる日常の再発見を、新鮮な経験として感じていただけたことだろう。シンポジウムでは、アートディレクターである北川フラム氏に参加を願い、「アートプロジェクトと街づくりの可能性」について語っていただいた。また、展覧会期間中にも講師を招き、一般市民対象の「まちなかアート公開講座」を開き、松戸の近代美術や景観デザイン、アートの楽しみ方から環境芸術まで、多方面にわたるリレートークが行われた。

人口48万の松戸市は、都心へ通勤・通学する人たちへの、ベッドタウンとしての需要にこたえてきた。大都市東京に寄りかかるとして、これまで美術館やアートセンターといった施設も開設されず、文化的独自性も必要とされない、典型的にグレーゾーン化したハイブリッドな郊外都市である。従って市民自身の意識も、松戸固有の文化や歴史・伝統・芸術への関心は薄く、地元への愛着や誇りを持っていないのが現状のようだ。ただ海外の事例をみても、文化的創造力の希薄な都市は減っていくという認識は深まりつつある。現代のような、精神的安定性を欠いた時代に、芸術・文化の果たすべき社会的役割を考える上で、表現活動を多様な社会との関係性と共振させる取り組みは重要であり、住民の地域への関心や理解、誇りや愛着を取り戻す為にも、創造的文化政策は必要不可欠なのである。

アートには本来その土地の持つ潜在能力をかき分ける特殊な力がある。地域とアートの新たな関係として、今回「松戸アートラインプロジェクト」が投げかけたものは、現在松戸が喪失しつつある固有性の確認である。無数に眠る地域の個性を再度見直し、そ

これから新たな可能性が見出せないかを探ること、それは改めて日常性を注意深く立ち止まって観察することから始まるのだ。さらにアートには人と人を繋げる力があり、地域住民との協働による新たな人間関係、世代や国籍を超えた人々の結び付きの可能性である。作家やアートを媒体に、自分たちと異なる文化や感性に触れ時間や場所を共有することで、多様な価値観を受け入れていく意識が生まれるのも、参加型アートの魅力であり、アートプロジェクトのダイナミズムなのだ。

展覧会は師走にかかるせわしい時期の開催であったが、街なかには仕掛けられた数々のアート作品が、訪れた多くの市民の記憶に残るものとなり、松戸について考えるきっかけづくりになったことを期待している。今後益々地域とアートの関係は広がりを見せ、地域文化の創造は人々の精神や意識の活性化に意義深いものとなっていこう。そのことから、「松戸アートラインプロジェクト」が継続事業となり、松戸市内のあらゆる場所で、文化政策プロジェクトとして展開・発展されることを願っている。

末筆ながら、この度のプロジェクト実施にあたり多大のご支援・ご協力をいただいた地域関係者・ボランティアの皆様には、心より感謝いたします。

## 「松戸の風景アートの可能性」

審査委員／三谷徹



若いアーティストの感性が松戸に花開き、実に新鮮な風が流れた2010年秋であった。それは、彼らのアートが、その街、その場所から物語をすくい上げ、それを作品として結晶化させてくれたからである。しかしランドスケープアーキテクトの目から見て、更なる展開を期待したい部分が残った。それは屋内に展示された、あの繊細な感性がもっともっと屋外で開花できなかつたのであろうかという思いである。室内作品のいくつかは、あらゆるノイズを遮断することで、研ぎ澄まされたわたしたちの感覚に訴えかけてきた。これがもし、日常の

街路空間に現れたら、そのとき始めて、大きな驚きと、自分たちの生活への祝福感がもたらされるだろう。

この背景には、プロジェクト開催側行政の問題も大きい。屋外環境アート、これは極めて困難な、同時に価値ある挑戦である。今回も、制約と混沌の入り乱れる街そのものと正面から向き合う果敢な作品がいくつもあった。彼らに喝采を送るとともに、今後の松戸側の展開に期待したい。

## 「新しい〈郊外〉都市のアートプロジェクト」

実行委員・審査委員／毛利嘉孝



松戸は、典型的な〈郊外〉都市である。東京のビジネス街まで通勤圏であり、住民のための都市機能はひとつおろしおろしと置いていながら、いたるところに緑が残っている。〈郊外〉という概念は、都市機能の集積と住職の分離、産業の高次化、核家族化といった近代化の過程の中で生まれた。そういう意味では松戸は日本の近代化を象徴していると言ってもいい。

けれども、こうした〈郊外〉も転換を迎えている。都心の情報集積度が極限まで高まる一方で、産業の多くが海外に移転し始めている。環境問題は深刻の度合いを増し、核家族化は少子高齢化にとって代わりつつある。

こうした大転換の中でアートは何ができるのか。アーティストとはどういう存在なのか。初めての「松戸アートライン」は、こうした問いに応える試みの一つである。確実にこれからのアートシーンを担っていく世代によるこのプロジェクトが、この大転換の混乱の中の一つの視座を示すことを期待したい。



開催概要

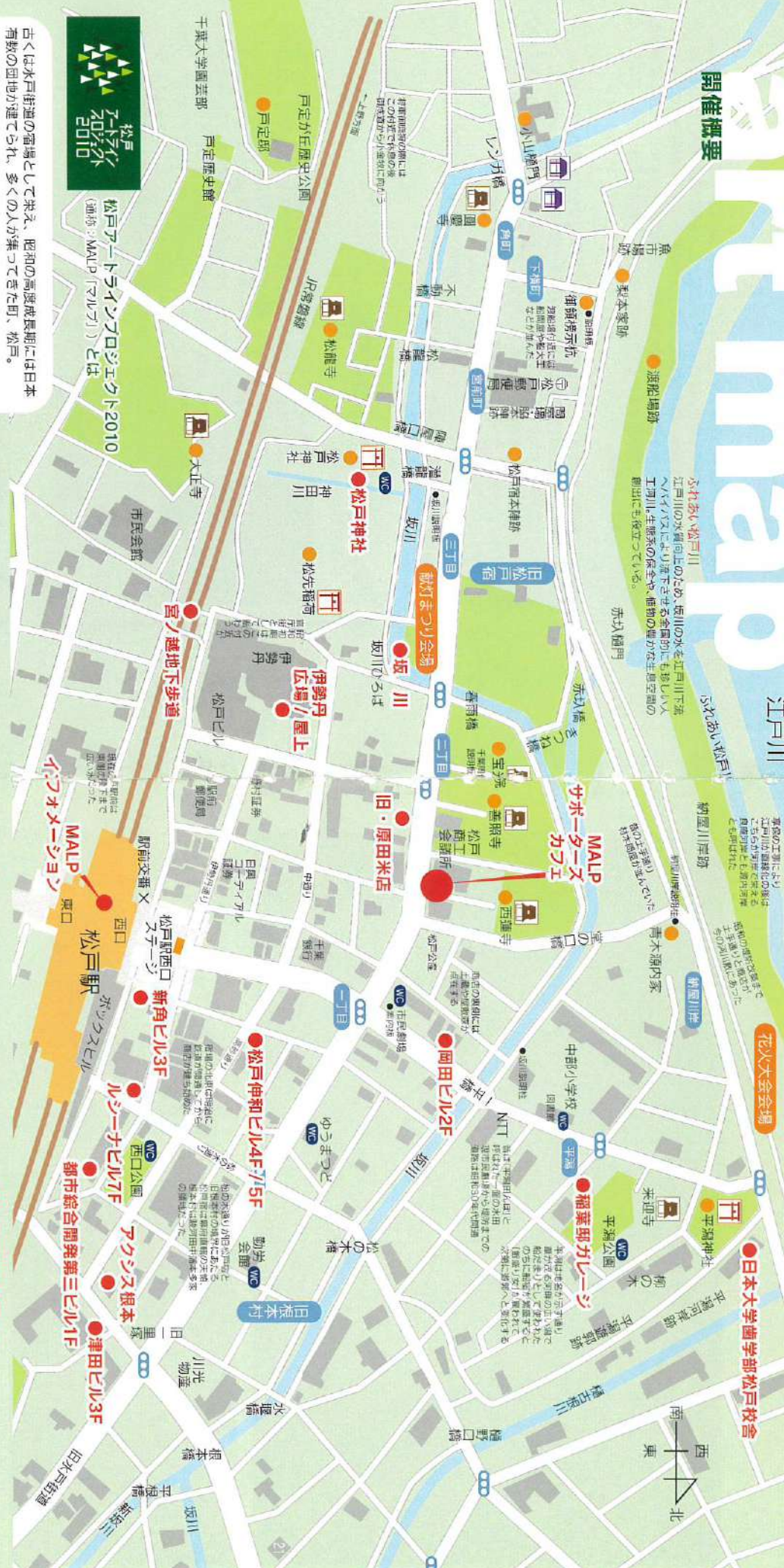
ふれあい松戸川  
江戸川の水質向上のため、坂川の水を江戸川下流へパイプラインにより運ぶことを念頭に、工期にも配慮し、松戸川に生態系の保全や、植物の豊かな生態空間の創出にも役立っている。

江戸川

江戸川の水質向上のため、坂川の水を江戸川下流へパイプラインにより運ぶことを念頭に、工期にも配慮し、松戸川に生態系の保全や、植物の豊かな生態空間の創出にも役立っている。

花火大会会場

日本大学歯学部松戸校舎



松戸アートプロジェクト2010  
通称: MALP (マルパ) とは

古くは水戸街道の宿場として栄え、昭和の高成長長期には日本有数の団地が建てられ、多くの人が集ってきた町、松戸。

河岸段丘に沿う緑豊かな斜面と川が流れ、古い街道や歴史的建造物などが点在する松戸駅前、31組の新鋭アーティストが、街を舞台に作品制作や展示を行うほか、ショップやワークショップ、地元伝統工芸との接点をつくり、松戸の魅力再発見のアートプロジェクトを展開しました。ここで、私たちは、アートの介入により、さまざまな人やことやものが行き交い、発酵し生み出し、まちが変容していくことを体験しました。人とまちの新しい関係を再構築し、アートとまちを再び一体とする1ヶ月でした。

アートテーマ「緑」

松戸駅は徒歩10分圏内に緑地と川が存在し、自然に恵まれた環境にあります。またその狭い範囲に旧街道や商店街、歴史的建造物、マンション等、そして多くの市民が生息する地域です。このことを踏まえ、松戸の多様な要素を「緑」として捉え、制作および展示に反映させました。独自の生態系をもった空間世界、自然、エコロジー、生命、記憶、多様性、複雑系、無正面性、にぎわい、調和、リラックス、等の要素があります。

※本プロジェクトは、JOBANアートプロジェクト協議会の協賛に則り実施されました。

「JOBANアートプロジェクト協議会」とは、JR常磐線沿線のイメージアップと沿線自治体の活性化を図ることを目的として、アートを基調とした沿線情報の共有と連携環境の整備により、沿線内外への情報発信力の強化と交流人口の拡大を目指します。

■構成委員

自治体: 台東区長、荒川区長、足立区長、葛飾区長、松戸市長、柏市長 (副会長)、我孫子市長、取手市長 (会長) 鉄道: JR東日本 東京支社長 (監事) 大学: 東京藝術大学長 (監事)

会期: 2010/11/20(土)~12/19(日) ※展示期間

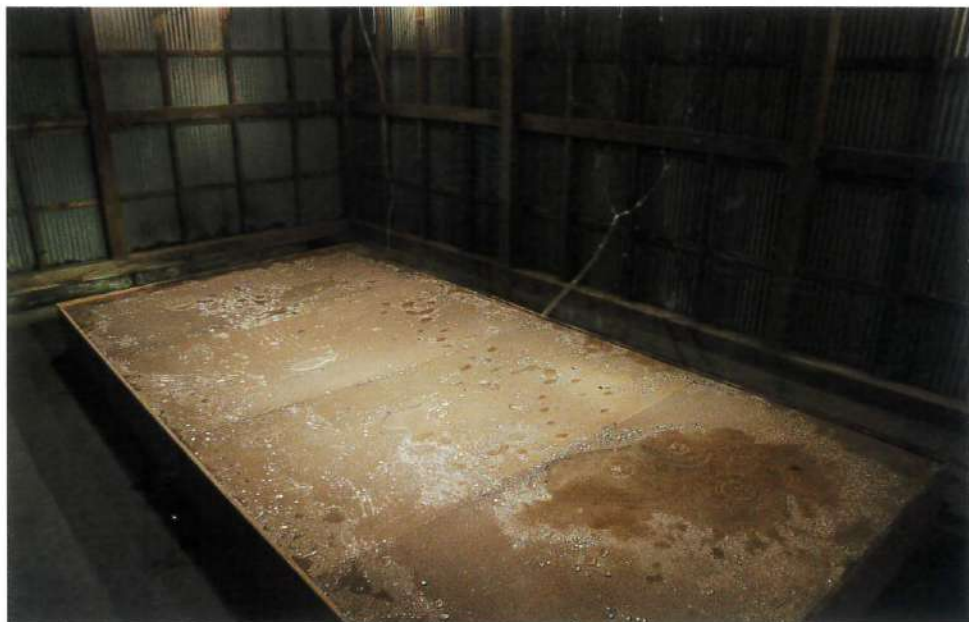
制作場所: 松戸駅周辺の空き店舗  
展示場所: 上記に加えて、歴史的建造物、公共空間など  
運営主体: 松戸アートプロジェクト実行委員会  
事業主体: 松戸市、NPO法人CoCoT  
公式サイト: <http://malp2010.com/>

審査員: 土屋公雄  
(愛知県立芸術大学教授、武蔵野美術大学客員教授)  
三谷徹  
(千葉大学文学部教授)  
毛利隆孝  
(東京藝術大学准教授)

展示会場  
●旧・原田米店  
池田剛介 大成哲雄 + 聖徳大学大成せみ  
大山エンリコイサム 木村恒介 小松宏城  
西尾美也 村上海 山下尊司

●日本大学歯学部松戸校舎  
高橋ちさと 戸井田雄 戸田祥子 松澤有子  
坂川 神原敬華 武蔵野美術大学建築学科 土屋公雄 + タジカ 山中彬充  
●伊勢丹広場 / 屋上 大山康太郎 近藤洋平  
●松戸伸和ビル4F / 5F 小原典子 村上敦兵  
●ルシーナビル7F 井口雄介 太田道  
●岡田ビル2F 枯山水クラウンテイング  
●松戸神社 毛原大樹  
●稲葉野カリエーシ 小山葉介  
●都市総合開発三ビル1F 代本版 (中島佑太 + 石橋愛)  
●アクシス根本 千葉大学産園デザイン学研究室 (大野 + 生田)  
●宮ノ越地下歩道 津田翔平  
●津田ビル3F 東京藝術大学  
●新角ビル3F 毛根麻子 + 聖徳大学研究室 + 市村作知道研究室  
●街の各所 遠藤一郎 山本麻穂絵





展示会場：旧・原田米店

池田剛介

Ikeda Kosuke

### 無人島に降る雨

Rain Falling on the Desert Island

素材：水、マグネットポンプ、その他  
water, magnetic pump, etc.

#### ●プロフィール

1980年福岡県生まれ。自然現象や知覚への関心をつうじて生物としてのヒトの知覚へとアプローチする作品を、絵画やインスタレーションといった様々なかたちで展開。主な個展に『Plastic Flux』(Lower Akihabara、東京) 『GoldfishPicture』(Voice Gallery pfs/w、京都)など。

#### ●解説

無人島の雨。それは日常的に経験するそれと同じ現象でありながら、どこかそこから切り離された雨の様態である。  
desert island——無人にして不毛な島に降る、乾いた水滴の群れ。



展示会場：旧・原田米店

大成哲雄＋  
聖徳大学大成ゼミ

Onari Tetsuo +  
Seitoku University Onari Seminar

### お米屋さんプロジェクト

Okomeyasan Project

素材：食品サンプル用白米、紙粘土、写真、米袋  
FRP、携帯電話、その他  
fake rice, paper clay, photograph,  
rice bag, FRP, telephone, etc.

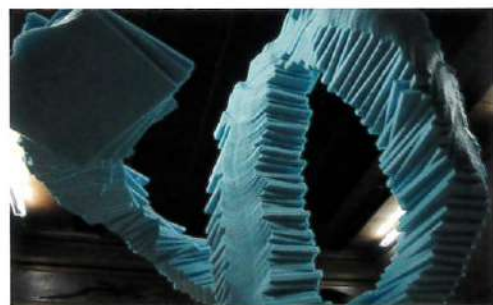
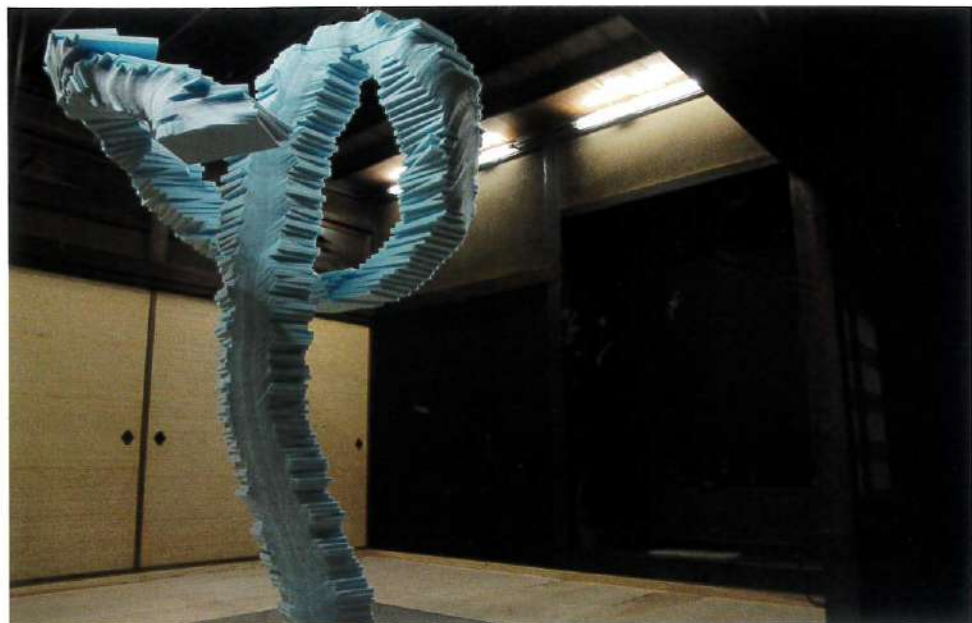
#### ●プロフィール

東京藝術大学大学院修了。聖徳大学専任講師。  
「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ  
2006、2009」等を経て地域とアート、コミュニ  
ケーションとしてのアートを研究。ゼミでは美術  
教育を担当、学生とは主に子ども対象のプロジェ  
クト、ワークショップを企画、実践している。

#### ●解説

歴史のある旧米店で「米」をモチーフに、ゼミ生  
が架空のサークル「おにぎり部」に扮し様々な人  
々と交流する場を創出。活動報告の展示とあわせ、  
週末にはワークショップ「こたつDEアート」、  
「松戸バリエア」を行った。  
<http://saitokubi.exblog.jp/>





展示会場：旧・原田米店  
 大山エンリコイサム  
 Oyama Enrico Isamu Letter

## Cross Section / Fossil

Cross Section / Fossil

素材：スタイロフォーム、鉄、ステンレス  
 styrofoam, iron and stainless

### ●プロフィール

1983年、東京生まれ。美術家。ペインティングやインスタレーション、壁画などの作品を制作、発表している。主な展示に「FFIGURATI」(contempra, 2009)、「memento vivere/memento phantasma」(旧フランス大使館, 2009)、「inside Out of Contexts」(ZAIM gallery, 2010)、「あいちトリエンナーレ2010」(名古屋市長着町, 2010)など。また、執筆やシンポジウムへの参加なども積極的に行っている。<http://www.enricoletter.net/>

### ●解説

スタイロフォームは、建築によく用いられる素材だ。断熱材として建物の内側にいれられることもあるし、模型を作るのにも使われる。この作品では、既製品そのままのスタイロフォームを連ならせ、部分的に切りおとした。その断面は、逆に素材そのものがもつボリューム感と造形性を拡張している。また一方で、それは、古民家という空間と呼応した、建築材の化石のようではないだろうか。



展示会場：旧・原田米店

木村恒介

Kimura Kōsuke

ゆるる景色の先に

Scenery

素材：旧原田米店母屋、景色、アクリルミラー  
mirror, scenery

#### ●プロフィール

きつと誰もが感じている、日常風景に潜む「微かな疑問」や「僅かな違和感」。そのような事を主題にし、制作活動に取り組んでいます。

略歴 2007年 武蔵野美術大学卒業  
2009年 東京芸術大学大学院修了

#### ●解説

旧原田米店母屋を取り巻く周辺の景色。今回の制作では、鏡を使用しそういった景色を部屋の中に取り込みます。さらに鏡を合わせ鏡に配置する事で、景色を無限に響かせていきます。このような空間を体験する事で、普段当たり前に見ている窓の外の景色を、いつもとは違う目線で楽しむ事ができればと思います。





展示会場：旧・原田米店

小松宏誠

Komatsu Kosei

### 静寂の中で風は探す

a quiet wind

素材：羽(アヒル・カラス)、  
ステンレス、アルミ  
feather (duck, crow), stainless steel,  
aluminium

#### ●プロフィール

自然現象をコントロールした装置により、思いや記憶を乗せた空間表現を続ける。近年は鳥の進化・構造・存在の美しさに着目したストーリーを展開中。また、アーティストグループ「アトリエオモヤ」としても活動しており、現象の持つ魅力とテクノロジーを融合させた作品群は国際的に高い評価を得ている。

#### ●解説

始めてこの部屋を訪れた時、時間が止まっています。しばらくウロウロしていると、少し風を感じました。時間は止まる事無く、ゆっくり進んでいる？もしくは、自分が入ってきた事で進みだしてしまったのかもしれない。風は自分が動いたから動いてしまったのかもしれない。僕はこの部屋で、風に包まれた羽製の超微風観測器を作る事にしました。



展示会場：旧・原田米店  
西尾美也

Nishio Yoshinari

まちやま

MACHIYAMA

素材：近隣住民から集めた緑色の古布、古着、毛糸  
green-colored old textiles, clothes and balls of wool collected from the neighboring residents



●プロフィール

1982年奈良県生まれ。2011年東京芸術大学大学院博士後期課程修了。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開している。2009年には西尾工作所ナイロビ支部を設け、アフリカでのアートプロジェクトに着手している。  
<http://yoshinarinishio.net/>  
<http://www.nairobi-artproject.jp/>

●解説

本展示空間は、会期前からその制作過程が公開されており、近隣住民から集めた緑色の古布や古着を使ってセーターやマフラーを作る編み物仲間のたまり場となることを目指している。参加者は好きな時間に来て、紐上に裂いた布地で好きなデザインの編み物作品を仕上げる。タイトルは、閉店して15年以上が経つ近所の手芸店「まちやま」に因んでいる。手芸の再考によって、本作は町のなかにテキスタイルの森（＝まちやま）を作り出す。





展示会場：旧・原田米店

満尾洋之

Mitsuo Hiroyuki

隠

ogres in the Tatami room

素材：水干絵具、墨、胡粉、膠、桐、椿、アガチス  
pigments, black ink, whitewash, glue, paulownia, cypriss, agathis

### ●プロフィール

1980年、千葉県生まれ。東京藝術大学美術学部日本画専攻卒業。同大学大学院修士課程日本画専攻修了。2009年、「満尾洋之個展～あやかし～」アートスペース羅針盤(東京・京橋)開催。最近は、「妖怪の場所性」「土地や地域の場所性」「ゲニウス・ロキ」等をテーマに作品制作をしている。

### ●解説

オニの語源は「穰(おん)」、つまり目には見えない「超自然的な存在」であるという。旧原田米店二階の部屋の中で、かつてかろうじて人の手入れで制御していた超自然的な存在が今は人が住むことがなくなったことで、この部屋の「雰囲気」によって表出しつつあるのではないか。目には見えない超自然的なものを発見し、その象徴として鬼で表現した。



展示会場：旧・原田米店

村上慧

Murakami Satoshi

松戸家

Matsudo-ke

素材：家の廃材、トタン、ガラス戸、ふすま、畳  
 scrap of house, tinplate,  
 the glass door, sliding door, tatami



●プロフィール

1988年に生まれ、東京の下町に育つ。2007年武蔵野美術大学建築学科入学。自分は人と話すのが得意ではないという事に気づいてから、別の方法で人と関わりをもとうとはじめたことがきっかけで、人と人の関を仲介する作品を作りはじめる。

●解説

松戸を訪れた全ての人に開かれた茶の間。





展示会場：旧・原田米店

山下竜司

Yamashita Ryuji

ユメウツツ

a dream, a reality

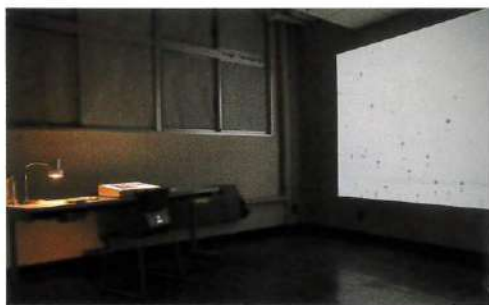
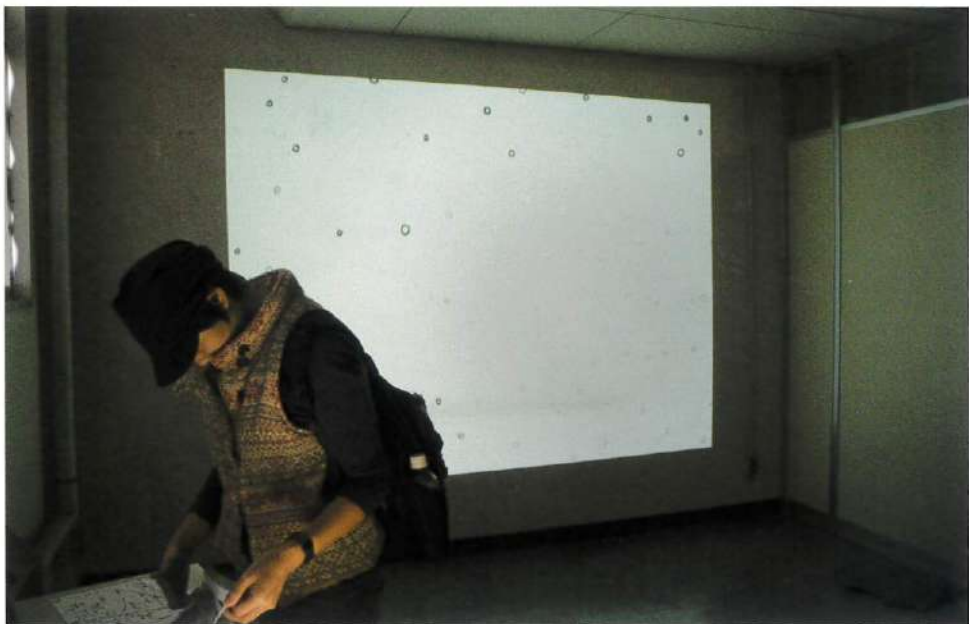
素材：アクリルミラー、パネル  
acrylic mirror, panel

●プロフィール

1985年熊本生まれ。人と人との関わり、人と社会との関わりをコンセプトに制作をしています。その場でしかできないこと、その時に立ち会った人にしか分からない感覚。共感するのではなく、時間や場所を共有することで、人それぞれの感情を揺さぶるような作品作りを目標にしています。

●解説

人間は目標が無ければ生きていけない生き物です。たくさんの目標や願いがあって、それが重なり合っている中の一人の自分。それは生活と同様に、自分独りの問題に見えても必ず他人と関わることで成り立っているのです。その目標や願いの中で人と人の繋がりを感じられれば、それは互いに反射し合い、確かな関係を築いていけると思っています。



● 展示会場：日本大学歯学部松戸校舎

齋藤ちさと

Saito Chisato

● 風景 森へ

rupam śūnyata, śūnyataiva rupam.

● 素材：映像

motion picture

● プロフィール

1971年 東京生まれ、1996年 女子美術大学大学院美術研究科修了（版画）  
 墨粒子繪や仏典に着想を得、点や粒子に着目した作品を展開している。「アーティスト・ファイル 2010」（国立新美術館）に参加。

● 解説

この作品は松戸駅前から浅間神社までの風景の色を反映させています。歩きながら風景を撮影して、その場所を象徴している色を抽出して、色の粒状に描き起こし松戸の風景の色だけが循環する映像に変換しました。日々の出来事はものすごいスピードで過ぎ去ってしまうけど、その番帳で歴史が作られているように。





展示会場：日本大学歯学部松戸校舎

戸井田雄

Toida Yu

## 時を紡ぐ～Marks～

Marks

素材：蛍光塗料  
luminous paint

### ●プロフィール

1983年 神奈川県横浜須賀市生まれ  
2008年 武蔵野美術大学大学院造形研究科修了

主な展示会  
あいちトリエンナーレ2010  
きてみん！奥三河  
UK-Japan Art, Design and Film award 2010

モノを作ることが好きです。表現の場、手法、媒体には囚われず、作る事に対して怯えながら、素直に、誠実に制作を続けたいと考えています。  
<http://www.iu-hap.jp>

### ●解説

『旧日本大学歯学部』、今は使われていないこの校舎も、昔は多くの学生達や先生達に使われていました。そんな今は使われていないこの校舎の廊下を舞台に、この場所が使われていた頃の名残や記憶を、作品として表現したいと考えました。

### ●協賛・協力 株式会社ジービープロ



展示会場：日本大学歯学部松戸校舎

戸田祥子

Toda Shoko

## ジオグラフィカルシアター

Geographical Theater

素材：ビデオ、ドローイング  
video, drawing



### ●プロフィール

2006年東京藝術大学美術研究科壁画専攻修了。  
2007年より中国政府奨学金留学生として渡中。  
2010年北京中央美術学院実験芸術科進修生修了。  
土地や地域と人との関係を特に映画や演劇のよ  
うな手法を取り入れ作品化する。最近は特に地理的  
特徴と人との関係に着目した映像作品を日本、中  
国、韓国にて滞在制作した。

### ●解説

土手という地形において繰り広げられる人々の行  
動や自然現象、そこからたち現れる独特のリズム  
を映像とドローイングによって探査し、それをま  
た構成します。風景に対して行われる小さなしか  
けは、風景と人との即興的で瞬間的な関係を強調  
したり、想像させたりします。人の身体と地理的  
関係のささやかで有機的なセッションに目を向け  
ます。





展示会場：日本大学歯学部松戸校舎

松澤有子

Matsuzawa Yuko

泊

haku

素材：ゴム粘土、ピアノ線、木材  
rubber clay, piano wire, wood

●プロフィール

私にとってアートとは関係そのものです。人、自然、時間、記憶をつなぎ無限に広がってゆく。日々の生活からのエッセンスをアートとして再形成、再構築することによって、日常はそれはそれは特別な感動すべき非日常でそこにはいつも命の循環があることを、詩的な質感で表現します。

●解説

なにかをめざし足をとめ  
どこかをめがけた進む  
目的はむこうにある

彼らはこの街にたくさんのちいさなうずまきの風  
をもたらし やがて旅立つ

来ては去り、また来ては去り  
そのくりかえしである

そしてまた私もそんな彼らを  
今がいまかと心待ちにするのである

●協賛・協力 泰豊トレーディング株式会社

ヒノテワシ株式会社

●写真：サカタヤスノ



展示会場：坂川

榊原歌華

Sakakibara Kahana

松戸森のじゅうたん

Mtsudo Forest Carpet

素材：ペットボトル、太陽光蓄電LEDライト  
plastic bottle, solar-powered LED light

●プロフィール

松ヶ丘小学校6年生。ボランティアチーム「ラブマツスマイル（ラブスマ）」リーダー。ラブスマは、松戸地域SNS「ラブマツ」に参加している市内の小学生、中学生だけのボランティアチーム。地域のイベント清掃や、梨モニュメント清掃依頼を市長さんに直接手紙を手渡し、実際に清掃活動をしている。

●解説

日々の生活の中で大量のペットボトルが消費されている。そのペットボトルを1つの木として見立て、森を形成した。ペットボトルにもう一度命を与え「森」という使命を与えた。それは昼と夜違う存在として。「木を見て森を見ず。森を見て木を見ず。」物事を見ることの図式化する習性を変えた。また展示終了後、作品はリサイクルされた別の形で命が宿る。





展示会場：坂川

武蔵野美術大学建築学科  
土屋公雄スタジオ

Tsuchiya Studio, Department of  
Architecture, Musashino Art University

籠庵

rouann

素材：竹、針金、モルタル、麻紐  
bamboo, wire, mortar, hemp thread

●プロフィール

私たち建築学科の学生は今まで設計課題を縮尺の世界でそれぞれ行ってきました。今回のプロジェクトでは18人の個性の強い生徒が集まることで様々なアイデアが交錯していました。この18人だからこそできる実物大のアートの楽しさを伝えていけると考えています。

●解説

坂川のテツキには毎日いろんな人が訪れる。休憩をしたり、おしゃべりをしたり、ご飯を食べたり、釣りをしたり。籠庵はそのすき間から感じる光や風のなかで包まれて過ごす時間を提供する。

●竹の伐採協力

榎本孝芳 高橋盛男 小浜の森の会  
松田明光 秋山の森 角田安弘 関さんの森

●竹の組みこみ指導 梨子本雅秋



展示会場：坂川

山中彬充

Yamahaka Akimitsu

ニュートラル

neutral

素材：松材、杉材  
pine wood, cedar wood

●プロフィール

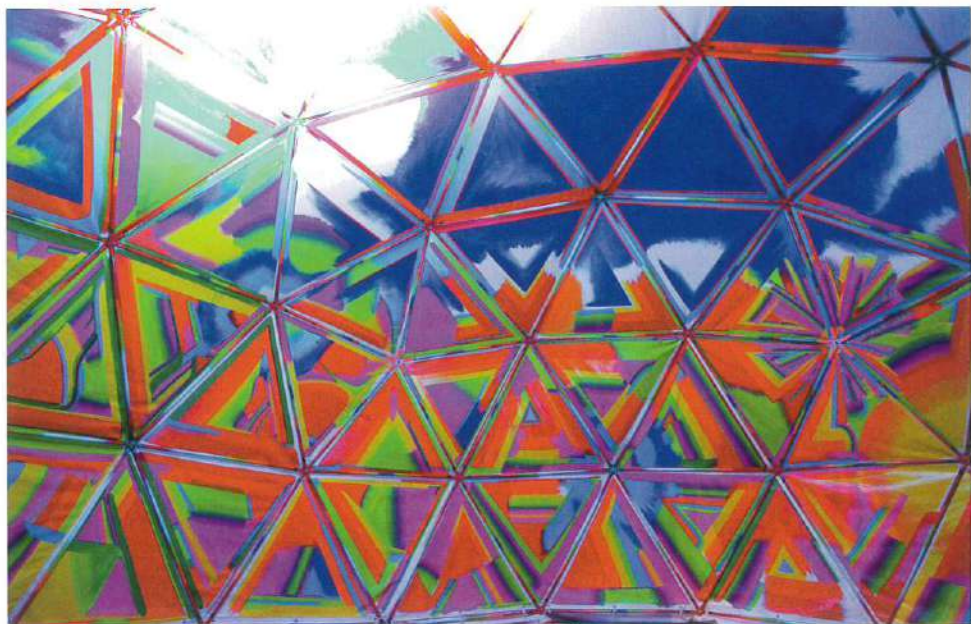
1986年富山県生まれ。フィールドワークをしながら場所の特性を抽出し、空間を変容させることを試みている。

●解説

歩いていると駅、店舗、寺院、神社、住宅、森、河川、人、動物を含めた景色が次々と展開していく凝縮された街である。そんな街のなかで自然環境と人工環境の間にある場所にどちらかに属する以前の流れの途中に存在している階段を制作した。制作中から坂川と地域の人との関係がじわりじわりと浮かび上がるものであった。階段の機能を超え、自然とお互いを繋ぐように寄り添い合っている。

●写真：中島悠二





展示会場：伊勢丹広場

大山康太郎

Ooyama Koutaro

NEXTEFX

NEXTEFX

素材：ドームテントに描画、ウレタン、  
ターポリン、鉄  
hemisphere structure, paint urethane  
on Tarpaulin

●プロフィール

Koutaro Ooyama a.k.a MON

1979年奈良県出身。京都市立芸術大学卒。  
2001年「DOPPEL」結成後、ライブペイントを  
主軸に活動を展開させる。模様を題材とし、自身  
の民族的感覚を振り起こすスタンスに様々なアイ  
デアを落とし込む。壁画、空間プロデュース、デ  
ザイン等、その活動の幅は広い。

●解説

祭り/レイブ/クラブカルチャーにおいて進化しつつ  
ある空間表現。古くは炎/火薬の演出から、ライト+半透  
明素材、ブラックライト+蛍光塗料、プロジェクター+  
インスタレーション、等々。日常からかけ離れた光の演  
出は、人々をやはり日常からかけ離れたテンションへと  
導いてきた。

「NEXTEFX」では、古代の寺/神社で使われていたとさ  
れる暈彩色パターンと、コンピュータ制御によるLEDラ  
イトの組み合わせにより、全く新しい空間表現が展開さ  
れる。光の「囁き」とも感じられるこの表現は、そもそ  
も素材が発色する為に必要な、光源そのものの波長を変  
化させることで得られる複算効果であり、あなたがこれ  
まで感じたことのない光の感触に違いない。見るのでは  
ない、体験せよ。

www.koutaroooyama.com

twitter:@KoutaroOoyama

●協賛・協力 Flare Tent アカリセンター  
ターナー色彩株式会社



展示会場：伊勢丹屋上

近藤洋平

Kondo Yohei

境界

Border

素材：釣糸、鉄  
fishing line, steel

●プロフィール

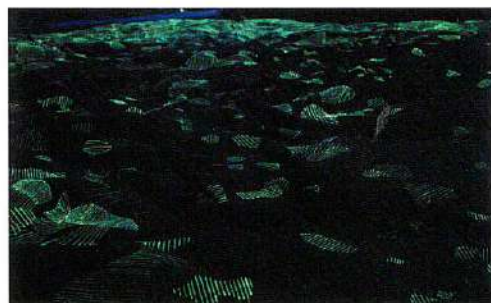
1984年岐阜県生まれ。  
2007年姫路工業大学卒業。  
2009年武蔵野美術大学大学院修了。  
物質と場所を主題とし作品を制作している。

●解説

伊勢丹松戸店の屋上はかつては遊具やゲームセンターがおかれ子供たちの遊び場だった。しかし、時代とともに顧客のニーズに対応するため今では定期的なイベント以外ではほとんど利用されることはない。今回、伊勢丹の屋上を2分する境界線をつくる。この境界によって屋上を訪れた人々は違和感を感じるかもしれない。その違和感の中で人々が各々の時間を過ごし、この作品をきっかけに新たな出会いが生まれることを期待している。

●協賛・協力 (有)三栄鉄工





展示会場：松戸伸和ビル4F

小原典子

Obara Noriko

## 光のピクニック

LIGHT PICNIC

素材：フェルト、綿、蓄光塗料  
fuerite, cotton, luminous paint

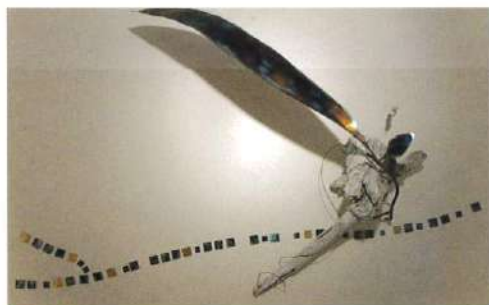
### ●プロフィール

記憶をもとに、さまざまなテーマの光るオブジェを制作し、インスタレーションによる発表を行っている。近年は、廃校や使われなくなったオフィスや古民家などに、記憶をテーマとした空間を制作している。ワークショップやコンテンポラリーダンスなど、幅広い視野に目を向けた活動を行っている。

### ●解説

松戸市は県境になる江戸川が流れ、豊かな自然がある。江戸川河川敷の土手の上で、運転した時の気持ち良さを表現した。日の光が芝生を照らし、河川敷に広がる植物は生き生きと輝いて見える。光と影のコントラストがとても綺麗で、緑の光に包まれた空間は開放感でいっぱいであった。江戸川は町の憩いの場でもある。この作品は、鑑賞者が自然と向き合う空間、また憩いの場を再現する。

### ●協賛・協力 水と土の芸術祭サポーターズ会議



展示会場：松戸伸和ビル5F

村上鉄兵

Murakami Tepppei

境界の森

space in the reef

素材：チタン、銅、アルミ、真鍮、流木  
titanium, copper, aluminum, brass,  
driftwood

●プロフィール

金属を主な材料とし、素材本来の魅力を引き出す形を常に意識しながら立体造形作品を制作し続ける。近年は金属チタンに独特の鮮やかな色彩を施し、軽やかな造形バランスでダイナミックかつ繊細な空間を生み出している。

●解説

宇宙の景色と生物の細胞の景色は同じだと言う。ミクロと無限の境界に輪郭ができて生命が視覚されるようだ。植物の葉を透き込み、身体を溶かし出して葉脈のその繊細な細部の隙間に入り込む。葉脈は銀河になり青く光り輝いていて、ただの闇だと思っていた空間は、様々な星の輝きが反射しオーロラのようなグラデーションが見える。ふと気づくと周りには宇宙の森が無限に広がって、境界はいつの間にかなくなっていた。





展示会場：ルシーナビル7F

井口雄介

Iguchi Yusuke

繰り返される日常

Next moment

素材：プロジェクター、カメラ  
projector, cmos camera

●プロフィール

カナダ国オンタリオ州トロント市生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業後、大学院より彫刻を専攻、現在博士課程在籍中。建築物や場所とかわるサイトスペシフィックでかつ巨大なインスタレーションを普段は展開している。

●解説

エレベーターを降りた瞬間から作品の世界が広がります。今回の作品は自身の中でも新たなジャンルへの挑戦をしている作品です。空間というもの新しく物質的に作り上げるのではなく映像の中で時間の違う空間を作ることにも挑みます。エレベーターを降りてからのつかの間の作品展開をお楽しみください。



展示会場：岡田ビル2F

太田遼  
Ohya Haruka

阻まれてまで  
wind are even prevented

素材：建材、外壁材、ミクストメディア  
building materials,  
outer walls materials, mixed media



●プロフィール

1984年東京生まれ。東京郊外の建売住宅で育ち、少年期から、郊外特有の何処にでもありそうな風景のつかみどころの無さや胡散臭さに興味を持つ。武蔵野美術大学大学院修了後現在、「欠落の風景」をキーワードに「風をみたかい？」と問いかける作品を作り続けている。主な展示に、「Jeans Factory Art Award 2008」(高知県 2008年)、「群馬青年ビエンナーレ2010」(群馬県立近代美術館 2010)、「Young Artist Japan vol.3」(東京・有楽町 2010)など。

●解説

その部屋には窓がありました。その窓は隣の家の窓とすぐ近くでしたが、隣の家の窓は閉まったままで中が見えません。ある時から、中に“彼女”の気配を感じ始めました。いつしか“彼女”に恋心を抱いていました。それに気付いてから、隣の家との距離が変化してきました。そして、今まで見えなかった“何か”が見えだしました。

これはそんな作品です。

●写真：太田遼







展示会場：松戸神社

## 枯山水サラウンディング

Kare San Sui Surrounding

### 人・待・水

WATER is WAITER

素材：コンピューター、AV機器、スピーカー、  
センサー、インターネット  
computer, audio processors,  
speakers, sensor, internet

#### ●プロフィール

音楽家/エンジニア/プログラマー/デザイナーなど様々なフィールドのアーティストが集まり結成した「人」と「音」の関係を新たな視点で提案するプロジェクト。音の扱いを作庭術「枯山水」になぞらえ、先端のマルチメディア技術と独自開発した音響処理技術を応用し、公共空間に「音の人口庭園」を演出させる。

#### ●解説

待ち人 (WAITER) と周囲を潤す水(WATER)にインスピレーションを得て作成された「音」の池。足を踏み入れた人は、小石が池に投じられたような音を耳にするでしょう。待ち人がつくるそれぞれの音の波紋が、周囲に軌跡を残しながら重なりあい、競重ものハーモニーを奏でます。日々変わりゆく季節の音が響く中、「音の記憶」を留めるように。



展示会場：稲葉駅ガレージ

毛原大樹

Kehara Hiruki

### 都市のカタログ

Catalogue of Cities

素材：コンピュータ、テレビ、ラジオ、その他  
computer, radio, television, etc.

#### ●プロフィール

手軽なローカルメディアを使った、コミュニケーションの研究。コジマラジオ、町中アート大学等のプロジェクトを手がける他、出張ラジオ局の活動を通して、誰でも出来るラジオ局やテレビ局の作り方、楽しみ方を伝える活動をする。

#### ●解説

アナログを愛用し、デジタルは利用する時代のはじまり。  
マスメディアが"アナログ"を捨てる2011年に向けて今からできる事を行ないます。





展示会場：都市総合開発第三ビル1F

小山泰介

Koyama Taisuke

## NONAGON PHOTON 1

NONAGON PHOTON 1

素材：DVD3枚、プロジェクター3台  
3 DVD, 3 projector

### ●プロフィール

写真家。1978年生まれ。主な写真集に「Dark Matter」(Utrecht, 2007年)、「entropix」(abp, 2008年)、「Melting Rainbows」(taisuke koyama projects, 2010年)。主な個展に「Melting Rainbows / Starry」(G/P gallery, 2010)の他、グループ展など多数。<http://www.tiskym.com>

### ●解説

253平米の空間をスクリーンとして、坂川に降り注いだ太陽光を照射する。剥き出しの壁面や天井は、九角形の光子の流れで満たされる。

### ●協賛・協力

Tomoya Kishimoto (Projection Director)



展示会場：アクシス根本

代本板  
(中島佑太×石幡愛)

Nakajima Yuta × Ishihata Ai

〈図書館〉

LIBRARY

素材：まちの人から集めた本、その本にまつわる物語  
books gathered from local people,  
stories about the books

●プロフィール

アーティスト・中島佑太と研究者・石幡愛のユニット。会話ややり取りの履歴から「まちの人達がおしゃべりをするための図書館」というコンセプトを立ち上げる。

活動記録用ブログ「代本板」  
<http://daihonban.exblog.jp/>

●解説

たくさんの方々に支えられながら生まれた、まちの人達がおしゃべりをする小さな図書館でした。Cooperated by 竹内公太、中山信之、森山路子、譜橋達太郎 BARBARA DARLING Special thanks to 上岡周平、緒方昌幸、長田雛子、渋谷萌、城塚家のみなさま、張順希、津田任且、廣実野 collaborated by 声田みのり、インダユーリ、イダツカマコト、内田聖良、大島健夫、かとうゆか、冠那奈穂、久保田沙耶、テリー植田、天谷窓大、堂薬那排、宮田篤、ムトウアキヒト、村上裕、やそそばおる (敬称略)

●協賛・協力  
(株)プラニッツ、建材市場高崎問屋町店





展示会場：宮ノ越地下歩道

千葉大学

庭園デザイン学研究室  
(大野+生田)

Garden Design Lab., Chiba Univ.

痕跡図

tracing

素材：鉄 iron

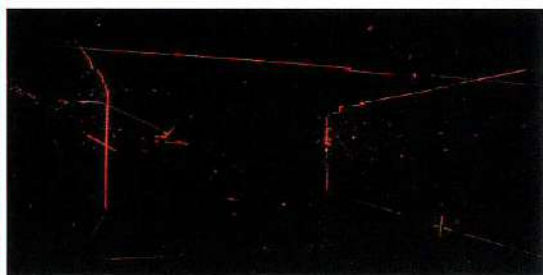
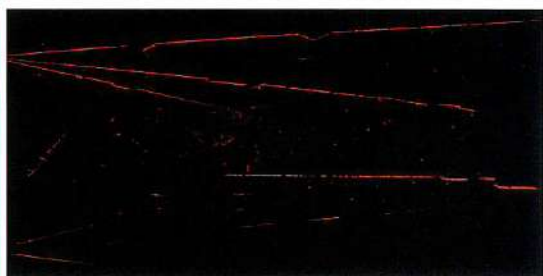
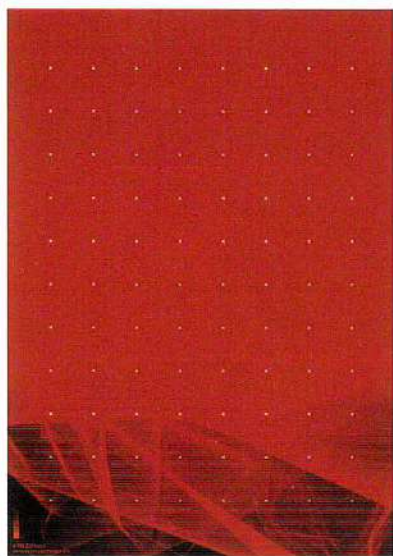
●プロフィール

ランドスケープアーキテクトの生田美菜子と大野  
院彦によるデザインユニット。環境問題や社会問  
題へ空間デザインという視点から取り組むプロジ  
ェクトを手がけている。

●解説

過去、そして未来の松戸の痕跡を鉄の壁に残す。  
松戸は、縄文期には海沿いに位置し、その後は江  
戸川の流域として、水の影響を深く受けて街が変  
化してきたが、その痕跡はいまやほとんどみられ  
ない。しかし、環境問題により再び我々は海面位  
を意識することになる。

今、この地下という空間に、過去、そして未来の  
水位の痕跡が現在に生きる人の痕跡によって表出  
した。時とともに腐食していく「痕跡」に何を想  
うのだろうか。



展示会場：津田ビル3F

津田翔平

Tsuda Shohei

## KYO-ZO 【響像】

KYO-ZO

素材：空気、音、点と線  
air, sounds, dots and lines

### ●プロフィール

1986年東京出身／東京在住  
2010年武蔵野美術大学卒業  
[www.shoheitsuda.net](http://www.shoheitsuda.net) [www.kyo-zo.com](http://www.kyo-zo.com)

### ●解説

KYO-ZOとは、津田翔平を中心として空間実験の活動をしている可変ユニット名であり、またはそのプロジェクト名。真っ暗な世界の中で無数の赤いラインを走らせ、そのラインが建物の壁や柱、鑑賞者をきめた様々なオブジェの輪郭をなぞるようにスキャンしていく。その現象を視るという行為は、普段の生活における「測る」という行為と結びつき、展示する場所によって作品は大きく変わっていく。

### ●写真：斎藤ちさと





▲展示 《A Wonderful Life: Tokiwadaira》 関谷洋子+毛利麗子研究室



▲ダンス公演 《途上の風景》 山崎節



▲トークイベント 《メタル放送大学ANNEX》  
メタル放送大学（安野太郎+若口祐之+高橋聡太）  
・写真：関谷洋子

▲▲▲▲▲  
展示会場：新角ビル3F

東京藝術大学  
毛利嘉孝研究室+  
熊倉純子研究室+  
市村作知雄研究室

Mouri Yoshitaka Lab. +  
Kumakura Sumiko Lab. +  
Ichimura Sachio Lab.,  
Tokyo University of the Arts

松戸市再地図化計画

RE/MAPPING MATSUDO CITY

●プロフィール

私たちは松戸という「都市」を今日どのように知覚しているのだろうか？都市の不可視の構造を写真や映像、身体パフォーマンスや音楽によって走査し、浮かび上がらせる試み。写真と映像による都市の記録と記憶のドキュメンテーション。週末毎の身体パフォーマンス、音楽演奏、トークイベントなど。

●解説

東京藝術大学大学院芸術環境創造領域・音楽環境創造科の3研究室のプロジェクト「松戸市再地図化計画」。平日は松戸市の常盤平団地をめぐる展示。週末は、関連シンポジウムのほか、松戸の都市文化に介入すべく学生たちのワークショップ・パフォーマンス・演奏が繰り広げられます。

<http://remappingmatsudo.web.fc2.com/>



展示会場：街の各所

遠藤一郎

Endo Ichiro

せーの! 未来へ

GO FOR FUTURE project in MATSUDO

●プロフィール

静岡生まれ。車体に大きく「未来へ」と描かれ、各地で出会った人々がそのまわりに夢を書いていく「未来へ号」で車上生活をしながら全国各地を走り、「GO FOR FUTURE」のメッセージを発信し続ける。「愛と平和と未来のために」（水戸芸術館）、「TWIST and SHOUT Contemporary Art from Japan」（バンコクBACC）、「隅田川いまほらい郷土資料館」（アサヒビール）など

●解説

みんなの夢を乗せて全国を走る「未来へ号」が松戸の街にやってきました。会期中、松戸駅を中心に神出鬼没に登場します。見かけたらいつでもみんなの夢をかきに来てください。夢に精一杯おかつていきましょう。未来へ！！！！





**公衆電話 a phone** TVをつけるためまわす入れ替わる携帯電話最新機種のCMばかり見る現代。人々の意識から消えつつある存在感が完全に消えてしまう前に、鑑賞者につけようと思いました。



**ごみ箱 a trash box**  
ごみ箱の姿をしていますが一応作品ですので、ごみを捨てないでください。



**燃えた消火器 a burnt fire extinguisher**  
消火器はいざ、という時のためあちこちに設置されています。でもそのほとんどが実際に使用されることなく使用期限を迎えます。



**丸型ポスト a post**  
昔の人々は、偉人や英雄の姿を彫像にして残しました。これもそのような感じのものです。



**本 a book**  
最近、電子書籍の話題をよく耳にするようになりました。本の厚みや重さが、いつかなくなる日が来るのかもしれないと思ったりちょっとさみしくなりました。

展示会場：NTT松戸営業所前  
日本大学歯学部松戸校舎  
松戸商工会館・別館前  
松戸市立図書館

山本麻璃絵

Yamamoto Marie

素材：楠 a camphor tree

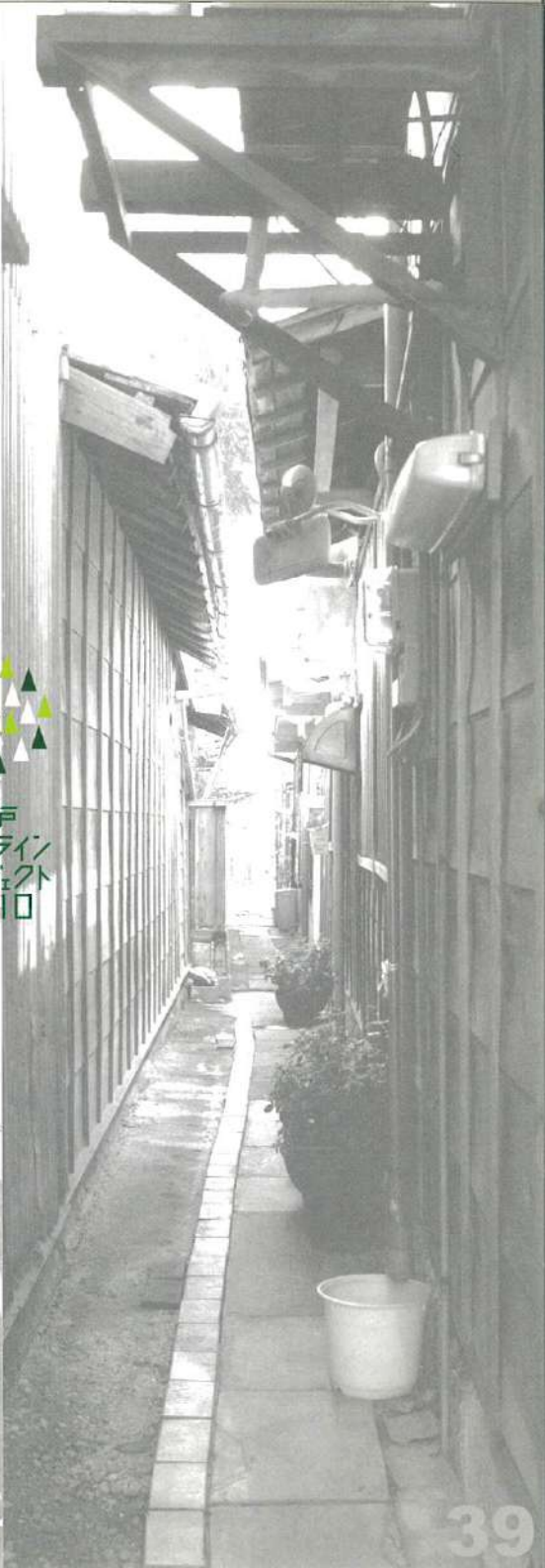
●プロフィール

1988年 東京生まれ  
2006年 武蔵野美術大学造形学部彫刻学科入学  
2010年 武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻彫刻コース入学

もの存在感を、木彫という機能的な要素をもたないモノに置き換える事で表現していきます。



松戸  
アートライン  
プロジェクト  
2010





# sympoSi

## 北川フラムシンポジウム



日 時：2010/11/23(日)  
開 場：15:30 / 開 演：16:00  
会 場：松戸商工会議所（商工会館）5F 大会議室  
入場料：無 料  
テーマ：アートプロジェクトとまちづくりの可能性を探る  
～持続可能なまちづくりの展開とアーティストの持つ可能性～  
第一部：16:00～16:50 北川フラム 講演  
第二部：17:00～18:00 パネルディスカッション

ゲスト

### 北川フラム | Kitagawa Fram

- ・「越後妻有アートトリエンナーレ」「瀬戸内国際芸術祭」総合アートディレクター  
1946年新潟生まれ。アートディレクター。1974年東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。主なプロデュースとして、「アントニオ・ガウディ展」、「アバルトヘイト吾」国際芸術展「ファール立川アート計画」、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」等多数。

パネリスト

### 土屋公雄 | Tsuchiya Kimio

- ・愛知県立芸術大学教授、武蔵野美術大学客員教授  
1955年福井県生まれ。89年ロンドン芸術大学チェルシー大学院彫刻科修了。04年には作品「記憶の領域」が文化庁賞上げとなる。現在千葉県の大森の中のアトリエを拠点に、「所在/記憶」をテーマとした作品を制作し活動している。

### 三谷徹 | Mitani Toru

- ・千葉大学園芸学部教授  
富士山の麓、静岡県沼津市出身。1960年生まれ。ハーバード大学大学院ランドスケープ・アーキテクチャー修士修了。東京大学大学院建築学専攻博士修了。環境アート、ランドアートの思潮を現実のランドスケープのプロジェクトに応用し、新しい都市空間の実現を目指す。

### 毛利嘉孝 | Mouri Yoshitaka

- ・東京藝術大学准教授  
1963年生まれ。京都大学経済学部卒業。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジでMA及びPh.D.取得。広告会社勤務ののち、英国へ留学。九州大学助教授、東京藝術大学助教授を経て07年より現職。





## ～「大地の芸術祭」が示す新たなアートと地域の関係性と、今後の松戸～

2010年11月20日に始まった松戸アートラインプロジェクト（MALP）のスタートから4日目。「アートプロジェクトとまちづくりの可能性を探る～持続可能なまちづくりの展開とアーティストの持つ可能性～」と題したシンポジウムが、松戸商工会館で開催された。ゲストは「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（新潟県十日町市、津南町）や、「瀬戸内国際芸術祭」（香川県高松市ほか）のディレクターとして知られる北川フラム氏である。

シンポジウムの第一部では北川氏の講演が行われ、第二部では今回のMALP出展者の審査員を務めた土屋公雄氏、三谷徹氏、毛利嘉孝氏を交えてのディスカッションや質疑応答が行われた。ここでは字幅の都合上、特にゲストの北川氏が、「アートと地域」を演題に、その思想や方法論などに踏み込んで語った「大地の芸術祭」に関する内容を中心に要約して抜粋しながら、予想を超える約200名もの市民らが訪れた当日のシンポジウムの様子を振り返り、提示された「アートと地域」との関係性の現在について記しておく（以下、敬称略。また「」内の言葉の引用は、特記がない限り当日の北川の発言による）。

### 「大地の芸術祭」

16時から始まった講演会は、はじめに松戸市長の本郷谷健次、さらに実行委員長の土屋公雄が簡単に挨拶をしたのち、北川フラムが「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」（以下、大地の芸術祭）の話を始めた。やや早口ながらも落ち着いた口調で訥々と、自身が関わってきた近年の地域社会に展開するアート活動について語った北川が、なかでも特に多くの時間を割いたのは、この大地の芸術祭についてであった。

大地の芸術祭とは、2000年以来、3年に1度、新潟県南部の越後妻有地域※1で行われている国際美術展である。

約800平方キロメートルの地域全体の棚田、空き家、学校など、地域の各所を舞台に展開される大規模なプロジェ

クトで、平均で1回あたり150近くの作品が毎回、展示・設置されており、会期外の時期でも150ほどの作品を見ることができるといふ。北川によれば、当初は3年に1度だけの開催であったものの、地域の人々の要望によって、2004年には「10テイズ」として開催年のあいだの年の夏にも「ミニ芸術祭」が始まり、現在では冬も含め、周年化していく方向にあるという。なお開始以来、2009年までに行われた4回の大地の芸術祭のディレクターは、すべて北川が務めている。

※1 十日町市と津南町を併せた地域の呼称。

### コンセプトと、地域の「誇り」へのアプローチ

大地の芸術祭は、一貫して、「人間は自然の一部だ」という考え、コンセプトに基づいてやってきた、と北川は語る。このコンセプトは、越後妻有地域の古来の歴史過程や、現在、地域が抱えている問題にまつわるものである。大地の芸術祭の舞台である越後妻有地域は、世界でも有数の雪深い地域であり、山や峠が多い。そのような農作には効率の悪い土地を、中央から追われてやってきた人々も含めた「先人たちが」「瀬替（せがえ）」※2などを避けて、異常なほどの努力を施して「棚田」とし、農作の場に変えてきた。ところが、そのような先人たちの努力にも関わらず、近年は、効率化の流れのなかで土地、すなわち「棚田」が捨てられつつある。さらには、それに伴って地域で進行する過疎化・高齢化によって、コミュニティも崩壊しつつある。このような地域が現在、抱えている問題と、その背景にある自然を無視した都市化・効率化への断固たる抵抗の意識がコンセプトには込められているのである。

※2 川の流れを上手く変えて田んぼとすること。

このようなコンセプトのなかで、大地の芸術祭は、何を



# symposium

## 北川フラムシンポジウム

～「大地の芸術祭」が示す新たなアートと地域の関係性と、今後の松戸～

狙って開催されてきたのだろうか。北川はシンポジウムで、大地の芸術祭の目的について次のように語っている。「この芸術祭が狙っているもの。アートの働きというのは、この地域の誇りを取り戻すということですね」

この発言から分かるように、北川フラムは、都市化のために犠牲にされ、過疎化・高齢化が進んでいく越後妻有地域の活性化を、地域の人々が失ってしまった自らの土地への「誇り」を取り戻すことから始めようとした。北川によれば、地域社会のなかで過疎化や高齢化が進むと、まずコミュニティの崩壊が起こり、そして、ついには人々が自らの土地への誇りを失っていく。このような「土地への誇り」を取り戻すことが、地域再生にとって第一に重要なことであると北川は考えたのである。

### なぜアートなのか

そして、この地域が失ってしまった「誇り」を取り戻すために、アートが必要とされている、と北川は言う。なぜなら、アーティストたちが見知らぬ土地に入り、活動を展開しようとする、常に誰かの手助けが必要となる。このような「手間がかかるアート」やアーティストを前に、地元のお年寄りたちは、「じゃあおれがやる」といって一緒に手を差し伸べるようになる。このようにして、アーティストや地域の人々が一緒に手を動かすことによって、アート作品は、アーティストのみならず、地域の人々、そして土地のものとなっていく。このような「手間がかかるアート」、そのための「手助け」、その結果、生み出される「土地のもの」としてのアートが、土地の人々の「誇り」へとつながっていくのである。

そしてまた、このよう「協働」の過程において、地域の人々は、自らが気づけなかった土地の「宝」の存在に気づくこともできる。地域特有の生活や、食べ物などを他者であるアーティストらが見つかることを通じて、地域がすでに持っている「宝」を発見し、自らの土地への「誇り」を呼び起こすことができるのである。

当初、市議員や町会・村会議員※3の全員に反対されたなかで始めたという大地の芸術祭や、そこで生み出されるアートは、このような「協働」の過程を経ながら、地域の「宝」となっていく、と北川は述べる。

※3 十日町市は、2005年の合併まで、1市3町1村から成っていた。

### アートとは対象との「距離」を表わす言葉

さらに北川は、美術（アート）とは古来より、一人ひとりによって異なる、対象との「距離」を示すものであることを強調した。北川は、次のように述べている。

「富士山がここからどう見えるか、北斎※4がいろんな形で描く。これは富士山からここまでが直線で百何十kmあるということと同じだけの意味を直感的に表している。そういうことをアーティストはずつとやってきました」

北川によれば、ラスコーの壁画※5も、プリューゲル※6も、ミケランジェロ※7も、アートは常に、対象（自然や社会・文明など）と、人間との距離を表わすものであった。

※4 葛飾北斎（1760-1849）は、江戸時代に活躍した浮世絵師である。化政文化を代表する画家の一人。

※5 ラスコー（Lascaux）洞窟は、フランスの西南部のモンティニャック村の近郊に位置する洞窟であり、洞窟壁の洞窟壁画は15,000年ほど前の作品とされ、先史時代の美術作品の代表作である。

※6 ピーテル・プリューゲル（Pieter Bruegel de Oude 1525/30-1569）は、16世紀フランドルの画家。農民たちの生活を描いた結晶など知られる。

※7 ミケランジェロ・ブオナローティ（Michelangelo di Lodovico Buonarroti Simoni, 1475-1564）は、イタリアの彫刻家、画家、建築家。西洋美術のルネサンス期を代表する芸術家のひとりで、詩人としても知られる。

そしてまた、現在の（越後妻有の）アーティストたちも同様である。アーティストたちは、いま、コミュニティの崩壊や自然環境の問題を前にしながら、自然や社会・文明という対象と、自らの「距離」を改めて示そうとしている、と北川は言う。

このようななかで重要なのは、アーティストたちが、「人と違って愛められる」というアートの持つ特徴によって、それぞれ異なる「自分の正義」を根拠にしながら、自らの「距離」を示そうとしている点にある。「人間はみんな違うんだ、違う人たちは貴重だし、その人たちがどうやって生きるかということを考えてはいけなないんだ」という視点から、自身と対象との距離を表わそうとしているのである。このようなアーティストの、それぞれ異なる対象との「距離」は、新しい情報に最短でアクセスするようなことが求められるような現代社会の、一元的管理と均質化に基づく価値観のなかで、いま一度、自然や社会・文明と人間との距離を考え直すことを示している、と北川は主張する。

## 地域の「資産」としての 空き家や学校の活用と、都市の人々

加えて北川は、いかにして地域の資産を活用するか、という観点の重要性についても語っていった。大地の芸術祭では、合併の施策によって、まつだい地区に「農舞台」などの建造物をつくったが、基本的には財源が充分ではなかった。そのようななかで、地域の資産といえるものは何か。北川は、それが家であり、学校である、と考えた。それゆえ大地の芸術祭では、出来る限り、空き家などを受け持つようにして、アーティストが地域の人々と協力しながら、空き家などを徹底的に使っていくことを目指したという。

そして、このような地域の資産である空き家や学校を活用したアートでは、都市の人々が積極的に制作活動に関わっていることは重要な点である、と北川は続ける。アーティスト、地域の人々に加え、都市の人々も含めたかたちでアートをめぐる「協働」が成り立っているのである。なぜ都市の人々は、そのような「協働」に関わって行くのだろうか。北川によれば、個人化が進みつつある現在の都市では、グローバル化を背景として、人々が均質化され、置き換え可能な存在としてみなされるようになっていく。あくまでも一人一人が「自給850円のABCでしかない」という状態となっている、と北川は比喻する。そのようななかで、都市の人々は今、第2の故郷、自分に関われる場所を必死で探そうとしている。

大地の芸術祭は、空き家や学校を使ったアートを媒介としながら、そのような故郷を求める都市の人々を、地域の人々と結びつける場となっている、というのである。「アートが一つの地域通貨になり」、アーティスト、地域の人々、そして都市の人々を結びつけているのだと北川は説明した。

その後、最後に少しだけ瀬戸内国際芸術祭の状況を説明したのち、北川は次のようにやや語気を強めて言った。「かなり意識的なところは、文化・芸術・美術で地域をつくらうとしている。これはすごく大きな流れだと思います」このように述べながら、北川は1時間を超える講演を締めくくった。



## まとめに代えて ～汎・地域社会型アートプロジェクトとしての 「大地の芸術祭」

現在、大地の芸術祭は、日本やアジアを代表する国際美術展のひとつであり、また、国内のアートプロジェクト※Bの典型事例と言ってもよい存在である。今回のシンポジウムに北川が招聘されたのも、大地の芸術祭が、地域社会に展開するアートプロジェクトとして先駆的なものとして見なされているためであろう。

※B アートプロジェクトとは、特定の社会的目標を掲げて行われる、一連の芸術文化事業や文化活動計画のこと。近年、特に日本においては、地域社会の美術館・博物館などの文化関連施設以外で、一定期間のあいだ展開する文化事業のことを「アートプロジェクト」と呼ぶことが多い。

但し、その規模はMALPと比べると、ずいぶん大きなものである。大地の芸術祭の場合、単独のディレクターに多くが委任されている状況などを含め、予算規模や運営主体の性格も、それぞれ異なっている。また、何より郊外地域（郊外都市）である松戸は、東京のような大都市とも、越後妻有のような農村とも異なる性格を持つ。

にもかかわらず、アートと地域社会との関わり方の見方に関して言えば、MALPと大地の芸術祭は共通点も多いことを見逃すべきではないだろう。たとえば、地域活性化やまちづくりの文脈の中でアートをを用いていること。あるいは、美術館や博物館などを前提とせずに、空き家、路上など地域社会の各所に展開していること。さらには、松戸（越後妻有）以外の土地からやってきた人々も含めた「協働」によってプロジェクトが成立していること。このように、大地の芸術祭の手法と、MALPのそれは、異なる部分も大きい。それゆえ、既に10年以上に亘って展開してきた大地の芸術祭を通じて、アートと地域との関係を考えることは、MALPにとっても示唆する部分が大いなのではなかろうか。

では、今回の講演で示された大地の芸術祭のアプローチは、現在のアートと地域の関係に関して、何を示していたのだろうか。ここでは、北川が最後に述べた「文化・芸術・美術で地域をつくる」ということの意味を改めて考えながら、現在のアートと地域社会との関係性について、少しだけ考察を加え、シンポジウムのまとめとしておきたい。

そもそも、これまでのアートをめぐる場といえば、特定の地域社会に住む市民を対象とし、作品を鑑賞するために設けられた美術館や博物館が、その中心を占めてきた。つまり、従来の地域社会におけるアートをめぐる場は、主に、行政的な「国家」や「地域社会」という枠組みを単位としながら、それぞれの地域内に住む市民が、アート作品を鑑賞することを主たる目的とするものだったということであ



## 北川フラムシンポジウム

～「大地の芸術祭」が示す新たなアートと地域の関係性と、今後の松戸～

る。特に、国民国家形成や、それを支える地域行政制度の確立を目指す近代化において、文化的装置としての重要な役割を果たしてきたアートをめぐる場（たとえば、国という単位では万国博覧会など、地域社会という単位では美術館、博物館など）は、特定の「地域社会」の文化をめぐる場として置かれ、それぞれの地域社会内の人々を主なターゲットとしながら、アート作品を提供する役割を果たしてきたといえるだろう。

けれども1980年代から90年代に誕生し、さらに2000年代に入って顕著に増加傾向を見せ始めている、新たなアートをめぐる場であるアートプロジェクトでは、※9そのような特定の地域を前提とした、既存のアートをめぐる場の性格や役割とは異なる側面を見ることができるとは、一つには、1960年代以降に隆盛したパブリック・アート※10などの影響を受けながら、美術館や博物館といった文化関連施設を用いることを前提とせず、地域の各所に活動や作品を展開していることであるが、アートプロジェクトの特徴として、さらに見るべきなのは、単にアーティストが単独で作ったものを観客に見せるというのではなく、市民やボランティアなどの地域内外の人々の「協働」や参加を伴いながら、アート作品が制作され、作品が成立し、あるいは運営がなされていることである。

※9 近年では、日本だけで一年間に百を超えるアートプロジェクトが行われている。なお、この「アートプロジェクト」とは、比較的、日本で頻繁に用いられる言葉であり、欧米などでは、人々の協働や参加によって成立するアートについて「関係性のアート relational art」、「社会と関わるアート socially engaged art」、「対話型アート dialogical art」などの用語が用いられている。それぞれ、従来の社会包括を目的とした「コミュニティ・アート community art」とは異なる概念として用いられることが多い。

※10 パブリックアート（public art）とは、美術館や博物館、あるいは商業ギャラリー以外の場に置かれる芸術作品を指す。野外彫刻とも呼ばれ、屋外の広場や道路、公園におかれたり、あるいは建物内の公共空間などに設置されたりする。1930年代のニューディール政策に端を発し、1960年代以降、各国で隆盛してきた。



本シンポジウムのゲストである北川フラムが、2000年から始まった「大地の芸術祭」や「瀬戸内国際芸術祭」で先駆的に見せてきたのは、そのような地域社会の枠組みを超えた人々による協働によって成立する、アートをめぐる場づくりの日本における展開の可能性であった。シンポジウムで語ったように、北川は、少子高齢化・過疎化の進む地域の活性化という社会的課題を踏まえながら、地域内外のアーティストや都市からやってくるボランティア、そして地域住民を「協働」のアートを通じて結びつけ、地域外の目を越えて地域に向けさせた（さらに、それを通じて、地域の人々に「誇り」を取り戻させて、地域活性化という課題を解決しようとした）。単に、アート作品を地域社会に持ち込んで、人々に鑑賞させようとしたのではなく、

「地域社会」や「都市」という枠組みを超えた人々によって形成される、〈汎・地域社会 Inter-local Community〉的なコミュニティを形成することによって、フィールドである地域社会の課題を解決しようとしたのである。もちろん、その他にも、屋内に置かれる絵画や彫刻のみならず、地域の自然を存分に活かしたアートが展開されていることは、大地の芸術祭の大きな特徴といえるものだろう。けれども、これらの点に関して言えば、すでに1960年代から70年代に隆盛したランド・アート※11、やコンセプチュアル・アート※12、パブリック・アートも同様に、「自然を用いたアート」であり、あるいは「脱・美術館」のアートであった※13。それゆえ、大地の芸術祭の、アートと地域との関係性という文脈における新しさ、あるいは、現在のアートと地域との関係性を見るために重要な点とは、このアートを通じた「汎・地域社会」的コミュニティの形成と、それに関わる人々の協働にこそあるのではなかろうか※14。

※11 ランド・アート（land art）とは、「大地」や「自然」、あるいは、土や岩石など「自然物」を用いた芸術のこと。アースワーク（earth work）とも呼ばれる。

※12 コンセプチュアル・アート（conceptual art）とは、觀念芸術などとも訳され、作品の物質的な側面や成果物ではなく、觀念の側面やアイディアなどを重視した芸術のこと。特に1960年代から1970年代にかけて世界的に芸術運動として隆盛した。

※13 また設立当初の財源についていえば、文部科学省の所轄となる美術館や博物館などの文化関連施設を前提とせず、国土交通省経由の財源を活用してアートを展開していく手法にも特徴があった。

※14 むろん、地域に固有の場や人々と、地域外からやってくるアーティスト、ボランティアからの「協働」に伴って、越えて来ても見られない魅力的なアートが生まれることによって、アートを通じた観光の需要が増加し、地域経済が潤うなどといった経済面での寄与もあった。先述したように、地域の自然などを活かしたアートを用いながら、いわゆる「文化観光」の視点を巧みに組み合わせた点も大地の芸術祭の特徴である。



したがって、大地の芸術祭を指揮した北川フラムが、今回の講演の最後に述べた「文化・芸術・美術で地域をつくらうとしている」という言葉が意味するのは、単に、越後妻有地域という地域社会を、文化や芸術・美術作品を持ちこんで観光化し、〈まちおこし〉するということの意味するわけではない。むしろ北川は、異なる思想や考えを持つ人々を受け入れることができる（そうあるべきである）、文化・芸術・美術によってつなげられる、汎・地域社会的な“コミュニティ”（土地的なコミュニティに対する、テーマ的なコミュニティ、とも言い換えられるだろう）を、都市／地域社会を超えた人々の関係性、「協働」のなかから作り、そのような関係性のなかから地域社会を作っていく、ということを描いていたのではないだろうか。※15

アートと地域の関係性という点、とかく特定の行政地域の視点からのみ問題を考えがちである。けれども、大地の芸術祭が示すように、地域の人々と、地域外の人々の協働、そしてそのあいだの「媒介（メデイウム）」としてのアートという視点から、その関係性を捉えることによって広がる可能性から、地域におけるアートの可能性を見つめ直す必要があるはずだ。

※15 むろん、このような協働が可能となった背景には、人やモノの移動や情報のやり取りを可能とするインターネットや、携帯電話などのテクノロジーの変化などがあつたことも見逃せない。新たなテクノロジーが、土地を越えた人々を、アートを通じて結びつけることを手助けしている側面もある。

\*\*\*\*\*

このような地域独自の資産の活用と、それを媒介とした都市や地域の人々の出会いや協働の重要性については、松戸でのアートの展開の可能性として、北川の講演後、パネリストたちが触れていた点でもあつた。たとえば、パネリストの毛利嘉孝は、松戸市に1950年代に出来た常盤平団地を例として、その社会的背景を紹介した上で、地域外の場からやってきた学生たちがフィールドワークに入り、作

品制作を進めた自らのプロジェクトでの活動のようすを振り返りながら、松戸という地域において、地域の既存の資産を活かしつつ、外部の人々がそこに関わっていくようなアート活動の可能性について触れていた。また、司会を務めていた土屋公雄も、同様の主旨で、「(MALPIは)松戸のいろんな表情の場所・サイトを転々としながらサイト・スペシフィックな仕事ができるのではないかと思います」と述べている。アーティスト、あるいは社会と関わる文脈からの美術批評者としての活動歴が長いパネリストたちが述べていたのは、大地の芸術祭における地域内外の「協働」と同じ視点を、松戸に持ち込むことの可能性であつたといえるのではなからうか。

なお、本稿をまとめている現在のところ（2011年3月時点）、松戸アートインプロジェクトが今後、継続していくのかは不明であるという。しかしながら、北川フラムやパネリストたちが述べていたように、地域の固有の土地、資産を用いつつ、アートを媒介として都市や地域の人々が関わり合う場をあちこちに作っていくことで、新たなアートによるコミュニティを作っていくということは、松戸の今後の芸術・文化活動に際して広く参考になるものだろう。もちろん一方で、東京と同じ「首都圏」に含まれる距離にある郊外都市（あるいは郊外地域）の松戸の場合には、越後妻有とは異なる手法が必要とされる面があるのも間違いない。

大地の芸術祭のアプローチを見た上で、しかし東京でも、越後妻有でもできないことをいかに可能なものとするか、そのような問いを考えることの必要性が、今回のシンポジウムをきっかけに再提示されたように思われる。

シンポジウムの最後の質疑応答の際に、北川フラムが「びっくりした」と述べたように、シンポジウムに200人もの人々が集まつたことから考えると、提起された問いに反応する今後の活動の展開を期待せずにはいられない。

(小泉元宏／大阪大学特任研究員)



# performance

## 山川冬樹パフォーマンス

日時：2010/12/12(日)  
開場：17:00 / 開演：19:00  
会場：都市総合開発第三ビル  
入場料：無料  
出演：山川冬樹、唐津屋友喜  
協力：一友会館、葛西屋呉服店、  
関宿屋、八嶋商店  
機材協力：田口造形音響  
制作：おっとり社

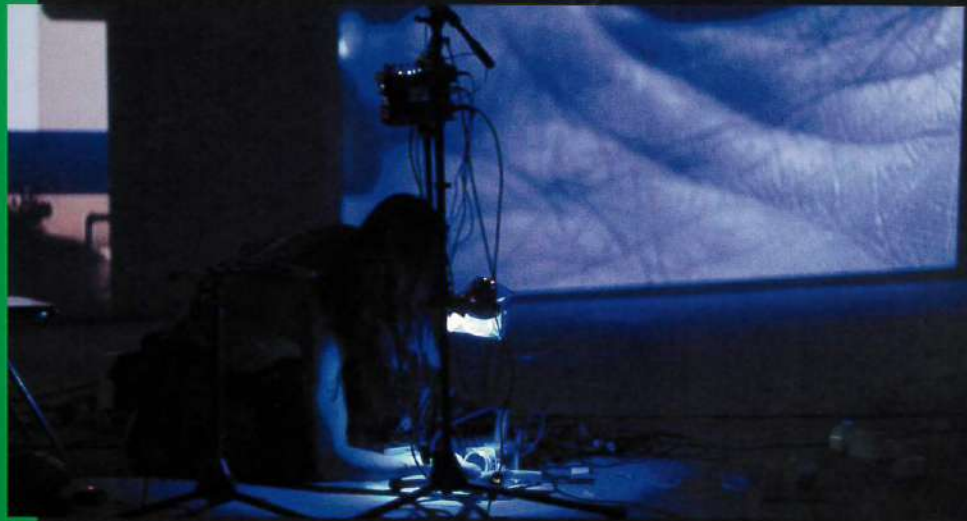
### プロフィール

山川冬樹 | Yamakawa Fuyuki

ホームメイ歌手/アーティスト。1973年、ロンドン生まれ。音楽、美術、舞台芸術の分野で活動。身体内部で起きている微細な活動や物理的現象をテクノロジーによって拡張、表出したパフォーマンスを得意とする。

唐津屋友喜 | Karatsuya Tomoki

昭和22年、長崎県出身。少年時代を平戸オランダ屋敷で過ごす。長崎県立北松農業高校卒業。郵政大学校高等部一科を修了。平成19年3月に郡内の郵便局を退職。現在千葉県在住。洋画「聖堂と寺院」F50 が郵政美術展特選(昭和63年)





## ● 解説

松戸駅に停車しては、発車していく鉄道の流れ。ガラス張りの壁を透して見える、歩行者、自転車、自動車の流れ。開け放たれたエントランスや戸から、会場に導き入れられる風の流れ。地下を介して水道局から配水され、蛇口から滴り落ちる水の流れ。

突然、乱入してきて古い歌を弾き語る“流し”のおじさんの調べ。断ち切られた髪が浮遊し、会場を延々と往復しながら告げられるクロノス的な時の流れ。そして生きている私の肉体を巡る血液の流れ。

提供された空間を、さまざまな“流れ”が出会うプラットフォームとして捉え、インスタレーションとパフォーマンスによって、“流れ”のアンサンブルを顕在化すること。そしてそのアンサンブルが、それぞれが生きては死んでいく命の流れと、当たり前のように共鳴していくこと。

そんなことを考えながらやりました。



## まちなかアート公開講座

大学・研究機関の専門家を講師に招き、一般の方にも分かりやすくアートやまちづくりに関わることを学ぶための教養講座。

会場：MALPサポーターズカフェ（ほくとビル1F） 定員：各回20名 参加費：無料



### 1 緑と花のまちづくり ～松戸での取り組みを通じて考える～

日時：2010/11/27(土) 18:00～19:30

講師：柳井重人（千葉大学園芸学部准教授）

### 2 コンテンポラリーアートの楽しみ方：アートを通じて社会を考える

日時：2010/12/4(土) 18:00～19:30

講師：毛利嘉孝（東京藝術大学准教授）

### 3 環境とアート／森の実験：英国グライステール

日時：2010/12/11(土) 18:00～19:30

講師：土屋公雄（愛知県立芸術大学教授、武蔵野美術大学客員教授）

### 4 松戸の近代美術史

日時：2010/12/16(木) 18:00～19:30

講師：田中典子（松戸市教育委員会学芸員）

### 5 風景のデザイン

日時：2010/12/18(土) 18:00～19:30

講師：三谷徹（千葉大学園芸学部教授）



## 伝統工芸士展

松戸市内、あるいは近隣在住の伝統工芸士の方をより多くの方にご紹介し、関心のある方にその技を教わりながら体験してもらうための展示や講座。

### 夏休みものづくり体験講座 ～伝統工芸に『和楽』を求めて～

日 時：2010/8/21(土)、22(日) 10:00～18:00  
会 場：松戸駅西口呉服屋「葛西屋」2階  
参加費：材料費実費 1,000円 (※象牙彫りは見学のみ)  
講 師：鈴木保雄 (下総染小紋)、穂積実 (江戸つまみかんざし)、荒川啓 (象牙彫り)  
協 賛：呉服屋「葛西屋」  
協 力：松戸駅周辺にぎやかし推進協議会  
後 援：松戸市教育委員会

### 伝統工芸士とその後継者たち ～手描き友禅を体験しよう～

日 時：2010/10/23(土)、24(日) 10:00～15:00  
会 場：松戸駅西口呉服屋「葛西屋」2階  
参加費：材料費実費 5,000円  
講 師：篠原清治、篠原少か、篠原るり (手描き友禅)  
協 賛：呉服屋「葛西屋」  
協 力：松戸駅周辺にぎやかし推進協議会

### 伝統工芸士写真展 ～松戸在住の伝統工芸士たち～

日 時：2010/12/10(金)～12/12(日) 10:00～18:00  
会 場：伊勢丹松戸店9階アートスポット  
内 容：市民フェスタの中で「第3回伝統工芸士展」として北島和男 (鉄鍛冶)、篠原清治 (手描き友禅)、矢吹寛 (べつ甲細工)、荒川啓 (象牙彫) による松戸在住の伝統工芸士4名の近影と技術、技法内容説明の展示ブースを設置した。



鉄鍛冶  
北島和男氏



手描き友禅  
篠原清治氏



べつ甲細工  
矢吹寛氏



象牙彫  
荒川啓氏





# festa

## 市民フェスタ

作品のジャンルは限らず、市民の方による作品や音楽を発表する場。  
 ※募集期間：2010/11/10(水)～11/25(木)

### 第1部

- 日 時：2010/12/4(土) 13:00～17:00  
 会 場：松戸駅西口デッキ  
 入場料：無 料  
 内 容：ステージでの音楽演奏やアートパフォーマンス  
 出 演：はな、吉田百合子、吉崎さとし、唐津屋友香  
 協 力：松戸駅周辺にぎやかし推進協議会、おっとり社  
 企 画：松戸アートライン市民フェスタ実行委員会



### 第2部

- 日 時：2010/12/10(金)～12/12(日) 10:00～18:00  
 (※最終日12/12は撤収のため16:00まで)  
 会 場：伊勢丹松戸店9階 アートスポット  
 入場料：無 料  
 内 容：市民団体やグループ・個人で制作した手芸作品や絵画・工芸作品などの展示  
 町会とアーティストが協力して復元した神輿の展示  
 来場者参加型企画ワークショップ「夢ファクトリー」  
 松戸市内在住の伝統工芸士紹介コーナーの設置 (第3回伝統工芸士展)  
 協 力：高塚団地子ども御興製作保存会、  
 伝統工芸士4名 (北島和男、篠原清治、矢吹寛、荒川啓)  
 企 画：松戸アートライン市民フェスタ実行委員会  
 (市民フェスタ事務局、田中雅子、村井真理、青木伸子)



## アンケート

### ■アートツアーアンケートより

来年もぜひ開催して下さい  
楽しい作品が多くて  
他のコースにも参加して  
みようと思いました  
(40代、松戸市)

松戸でアートイベントが  
開催されるのに驚きましたが  
定着することを願っています  
(30代女性、松戸市)

普通的美術展では  
作品の解説などないので  
いろいろ説明いただき  
また説明も分かりやすく  
良かったです  
(40代、東京都)

これからもっと町に  
浸透していけば良いなど  
思いました  
(20代女性、神戸市)

楽しく拝見しました  
坂川の竹の作品など  
夢があると思いました  
(60代女性、松戸市)

若い人は  
いろいろの発想を  
なさるので  
びっくりいたしました  
(60代女性、千葉市)

是非、継続・発展  
させてほしい  
(60代女性、東京都)

松戸市内風景やモチーフを  
作品の中にかいているものが  
多かったことに松戸愛が  
感じられました  
(20代男性、山形県)

広範囲で楽しかった  
はじめてだったので  
分かりにくいところもあつた  
案内により気が付いた  
(70代女性、松戸市)

ポストとかTELボックスとか  
このまま残したらよい  
松戸におもしろいものがあるよ、と  
良いのではないか  
なかなか、おもしろかったです  
(60代女性、松戸市)

旧家など見られて  
良かったです  
(60代男性、松戸市)

### ■ボランティアスタッフ座談会より

- ・松戸はベッドタウン。川向こうは区内だが、なかなかこれという目玉がない。いろいろとやってみることで松戸が活気づくことは大事。今回の取り組みを見てまだまだ松戸も捨てたものではない、という感想を持った。
- ・他所のアートプロジェクトに比べて1ヶ月間という長い期間の開催だったが、まちおこしとしての目的があるなら、1ヶ月はどうしても必要だと思った。出会った地元の方々も、子どもが暗くなってから兄弟で回っているのに出会ったりして、とても楽しそうに見えた。
- ・松戸の近隣の市や町にもっと知ってもらって、来てほしかった。
- ・市民にとって、地域に住んでいる人にとって、今まで知らなかった松戸の顔を見ることができたと思う。
- ・プロジェクトの影響で売上の上がった店もあると聞いている。集客につながるメリットがあるのだから、企画の段階で商店会の意向をとり入れる工夫をすももっと協力が得られるのではないかと。
- ・商店会とともに楽しみながらイベントを盛り上げていける可能性を感じた。
- ・空き店舗がプロジェクトで人の出入りができることで実際に埋まっていったところもあると聞いている。まちおこしとしては効果があるのだと実感した。
- ・ボランティアで参加することで、アーティストの人たちと話せたり知り合えたりして、とても有意義だった。
- ・アートと言うと、生活に根差したものや絵などのものをイメージすることが多いのだが、空間の作品が多くて、とても刺激的で新鮮に感じた。





# voice

## まちの声

今回のプロジェクトを、まちの人々はどのように見ていたのでしょうか。会期終了後、立場の異なる3名の方にお話を伺いました。

### ■「おこめのハラダ」店主 原田一紀さん

今回の松戸アートラインプロジェクトで、原田さんには、古い商家という非常に印象深い場所を提供していただきました。まず、おこめのハラダの歴史はどのようなものなのでしょうか。

もともと街道沿いで、お米ではなく様々なものを売っていたようです。水戸の徳川家に商品を納める御用商人だったという説もあります。お米が主体になったのは明治になってからです。展示会場となった旧・原田米店は、大正のはじめに建てられたものです。2006年まで、住居兼店舗として使っていました。そこで精米までやっていたんですよ。

実際に展示を観てみて、また場所を提供してみてどのような感想を持たれましたか。

会場の提供を打診されたときは、アーティストがどう使うのか想像もつかないし、どう管理すれば良いのだろうと不安もありましたが、この建物を生かした展示ができれば面白そうだと思いますね。旧・原田米店の展示のなかで印象に残ったのは、店舗2階で展示していた襦袢です。あそこは昔、私の部屋だったんですよ。あんなに格好良くなるなら、もっと掃除をしておけば良かったと思いました(笑)。

普段うちに来てくれているお客さんも、「見に行ったわよ」「アーティストと話してきたわよ」となどとおっしゃっていました。アーティストも、何をやっているのだろうと不思議に思っただけの方々と丁寧にコミュニケーションしていたようで、それはありがたいと感じました。元々商家として作られた建物ですので、展示をきっかけに人が沢山集まってくれたのは嬉しいことですね。

展示が終わってみて、感想などがあればお願いします。

1ヶ月の展示はあっという間でしたが、様々なアーティストの感性に触れられて本当に楽しかったです。これからは、ぱっと花火が上がって終わりというのではなく、もっと継続的な動きがあると面白いのではないかと思います。

### ■「根本第三町会」会長 津田任且さん

津田さんは所有されているビルの一室を、今回の松戸アートラインに提供していただきました。どのようなきっかけがあったのでしょうか。

きっかけとしては、2010年3月に、MADウォール(※)を立ち上げたことですね。高架道路の壁面にもともと描いてあった壁画が30年経って汚くなっていた。だから何とかしようと、いくつかの町会で協力して、いくつかの町会で共同で市に要望書を提出していました。そこに絵を描きたいというNPOがいると紹介されたんです。まさに願ったり叶ったりでした。このとき、アーティストたちには細かい要望をせず、この壁面の向こう側に何か明るいものがあると感じさせるものにしてほしいとだけ伝えました。作品をみるとその願いは伝わったのではないかと思います。住民と行政、NPOという三者がそれぞれの思いを持ち寄って協力しあえば、こんな事が出来るのだと実感しました。この経験があったので、アートラインへの協力もしやすかったです。



(※) MADウォール

松戸=MADの名を冠した壁画ペイント。根本第三・第九町会や松戸市、NPO法人CoCoTの協働により実現。駅徒歩3分のバイパス創設の約150mを舞台に、オランダのストリートアート界を代表するZEDZ、国内から大山エンリコイサムとMHAKの3名のアーティストが壁画アート作品を制作した。

実際にアートラインに参加してみたの感想はいかがですか。

展示してくれたアーティストと「今日はどうだった」なんて一時間も話こんだり、本当に楽しかった。私たちが生きている日常は、繰り返しの中に小さな変化がある世界だけれど、アートには人にはつと何かを気づかせる力があると思います。生活とアートという2つの世界が、溶け合ったりぶつかったりしながら出会う、このことには驚きや発見がある。それが非常に面白かったです。

アートラインが終わって、何か提案などがあればよろしくお願いします。

住民や観客と、アーティストが話し合える場が作れば良かったですね。住民が松戸を見る感覚と、アーティストが松戸を見る感覚は違います。住民のほうから「ここはこういうイメージにしたいんだが…」などと問題提起しても面白いのではないのでしょうか。

## ■ 「cake&cafe琥珀」店主 田中良太さん

琥珀さんは作品展示も行っている喫茶店ですが、今回のプロジェクトを地元の立場でどのように見たのでしょうか。始めにお店の成り立ちを教えてください。

父の代から37年間営業しています。生まれも育ちも松戸なんです。作品展示は松戸アートラインプロジェクトが終わった位から、アーティスト募集という形でやり始めたんです。

アートラインプロジェクトをどう思われましたか？

最初は何をするのかよく分からなかったのですが、アートイベントだと聞き興味が出てきました。それが丁度アートラインプロジェクトが終わった頃だったので、残念だったなど。展示はインパクトがありましたね。今まであった自然の中にアート作品が「ボン」とあると、「なんだろう？」と思うし、興味があればより面白い。美術館の中で見ると面白いというか疲れる感じがするけど、もっとコーヒー飲みながら気軽に楽しめるといいなと思います。

期間中のお客さんの反応は？

おかげさまでパンフレットを持って来店される方や、「あそこの建物って古いの？」「次どこ回ってきたらいい？」など聞かれる方が結構いました。そうやって商店も盛り上がりれば一石二鳥だと僕は思います。だんだん人が外へ行ってしまい、松戸で何かするというのが実際今ないですから。若い子たちが都内に行かないで、松戸を盛り上げてくれたらいいですね。

今後アートラインを続けていく上でこうなったらいいと思うことは？

この展示が終わっても残せるものがあるといいですね。今回であれば坂川の作品など。残っていれば自分もやりたいという人が出てくるかもしれないし。また70、80歳でも絵を描いている方はいるから、そういう方に声をかければもっと面白いのでは。第2回があるなら、私は知り合ったアーティストに声をかけたいです。こういう人たちは、僕らが思っている以上に時間をかけて制作する方が多いので、長いスパンを設けてほしいですね。ぜひ頑張ってください、次回はもっと協力したいです。

・クロージングパーティー



・アートツアー





## data

## データ

## ■来場者数

・来場者数：延べ37,409人

※観測地点：12ヶ所

(旧・原田米店、伊勢丹広場 / 屋上、岡田ビル2F、日本大学歯学部松戸校舎、  
稲葉邸ガレージ、松戸伸和ビル4F / 5F、新角ビル3F、ルシーナビル7F、  
都市総合開発第三ビル1F、アクシス根本、津田ビル3F、MALPサポーターズカフェ)

・内訳 (平均値)

平日：延べ820人 / 日

祝日：延べ1,933人 / 日

※いずれも13ヶ所の合計

・道路上の集計 (参考値)

通行人：延べ58,554人 / 期間中

※観測地点：4ヶ所 (坂川、松戸神社、宮ノ越地下歩道、NTT松戸営業所前)

## ■メディア露出

・日刊紙 (全国、地方) 記事数22

日経新聞、日経MJ、朝日新聞、読売新聞、産経新聞、東京新聞、千葉日報、松戸よみうりなど

・雑誌 (全国、地方) 記事数 8

ソトコト、月刊ぐるっと千葉、るるふなど

・電波 (テレビ、ラジオ) 記事数 5

NHK、千葉テレビ、コアラテレビ、ベイFMなど

・ウェブ媒体 記事数23

CBC-NET、47NEW(共同通信ニュース)、リビング柏など

・その他 (市内・地域情報) 記事数 3

広報まつど、千葉県ウェブサイトイベントページ

合計記事数：61



## 松戸 アートライン プロジェクト 2010

### 松戸アートラインプロジェクト実行委員会 (順不同)

委員長	土屋公雄 (愛知県立芸術大学・武蔵野美術大学)
副委員長	根本孝芳 (松戸まちづくり交流室テント小屋代表)
	毛利嘉孝 (東京藝術大学)
	大成哲雄 (聖徳大学)
	森谷秀樹 (にぎやかし推進協議会)
	飛田勤 (東日本旅客鉄道(株)松戸駅長)
	薄葉博司 (松戸商工会議所 専務理事)
	澤田正宏 (野村証券 松戸支店長)
	弓谷景二 (伊勢丹 総務部長)
	柳井真人 (千葉大学 園芸学部 准教授)
	高山勉 (NPO法人CoCoT)
	津田任且 (根本第三町会長)
	松下徹 (プレーレ松戸)
	森浩一郎 (新京成電鉄(株))
	伊藤恒 (松戸市 市民環境本部 経済担当部 商工観光課長)
	桜井茂 (松戸市 生涯学習本部 社会教育課長)
	石井久雄 (松戸市 生涯学習本部 戸定歴史館長)
	小宮恒夫 (松戸市 総務企画本部 政策調整課長)

事務局	松戸市 NPO法人CoCoT
	小山淳子 寺井元一 庄子涉 奥田雅子 勝彰子 阿部剛 赤星友香 岡田拓也 川村博

### 協 力

JR東日本 松戸駅 松戸商工会議所  
松戸駅周辺にぎやかし推進協議会  
新京成電鉄株式会社  
松戸宿商業振興連合会  
NPO法人ありのま・地域活動支援センターほくと  
おこめと笑顔の店ハラダ  
(株)有田商店 株式会社伊勢丹松戸店  
株式会社西屋呉服店  
株式会社ミニミニ城東 松戸店  
株式会社森谷エステート  
株式会社山一ハウス 株式会社ル・シーナ  
新角ビル 津田ビル  
都市総合開発株式会社 日本大学歯学部  
松戸宿坂川献灯まつり実行委員会  
松戸ビル (順不同)

### 松戸アートラインプロジェクト2010 カタログ

発 行：松戸アートラインプロジェクト実行委員会  
発行責任者：小山淳子

デザイン：Ben Design Office 高山 勉  
写 真：富田了平、土屋うづ樹  
編 集：寺井元一、庄子涉  
協 力：大和田俊、小泉元宏、服部睦子、真島有希

2011年3月25日発行

お問い合わせ  
松戸アートラインプロジェクト実行委員会事務局 (NPO法人CoCoT内)  
〒271-0092 松戸市松戸1836-2 にしきのビル5F  
TEL：047-366-8909 FAX：047-369-7445  
メール：info@malp2010.com

※無断転載を禁止します





松戸  
アートライン  
プロジェクト  
2010

運営主体／松戸アートラインプロジェクト実行委員会  
事業主体／松戸市 NPO法人CoCoT

※本プロジェクトは「JOBANアートライン協議会」の趣旨に則り実施されました。